

郎路生麻·幹主

川柳雜誌

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
大正十六年一月一日發行每月一回一日發行

川柳雜誌 第四卷第一號



川柳雜誌社發行

ドーコレ
(萃拔) 譜新月正
ひ揃粒の枚八十九



印貝外内
躍異るけ於に頭年
觀壯の亂燎花百

小 映 唄 畫	掛 映 合 畫	活時 劇代	マキノ マキノ	<p>刀三 目く</p> <p>たゞひそれがゲラであらうき漱石であらうき、乃至は二百圓もするオーバにでも一度はけちを付けて見なければ我慢の出来ない私ですが、貝印内外レコードに對しては残念乍らけちの付け様がありませぬ……なご、自畫自賛を敢てして置きます</p>	琵琶 筑前	芝居	義太夫 芝居	浪花節	雜子	芝居	
キ 鈴 ネ 蘭 マ の ノ 唄	映畫成金「二枚續」	狼 火「二枚續」	シヨ ン		湖 水 渡「三枚續」	「全十一枚之内」 太巧記十段目「八枚」	「吉田家秘曲」 南部坂雪の別れ「四枚續」 「青マ一ク」 「布入サツク入」	田中傳四郎社中	忠臣藏「全十二枚之内」 大序ヨリ九段目マテ拾枚	田中傳四郎社中	田中傳四郎社中
山西都 路賀初 芳静 子惠子	梅田五萬 田五郎	上都賀 上田五萬 樂行一	シヨ ン		法 川 原 旭 風	竹本住廣 田中傳四郎社中	吉田一若	田中傳四郎社中	田中傳四郎社中	田中傳四郎社中	田中傳四郎社中
映畫劇	映畫	映畫	マキノ		諺	俚	端唄	長唄	「青マ一ク」 桶公「四枚續」	「青マ一ク」 桶公「四枚續」	「青マ一ク」 桶公「四枚續」
鳴門秘帖	照る日くもる日	鳴門秘帖	マキノ	小 原 節	追分「尺八伴奏」 五段返し「洋行はやりも の」串本節	吾が國さ、海晏寺 二上り新内、青柳	宮山山清庵	上調子 三味綿 芳村孝一 柁屋勝丸 吉治	上調子 三味綿 芳村孝一 柁屋勝丸 吉治	上調子 三味綿 芳村孝一 柁屋勝丸 吉治	
上玉大市 田木谷川 五悦友三 萬悅三郎 樂子郎	上田五萬樂	西條和洋管絃樂團	マキノ シヨ ン	越中本場 藝妓連	山村豐子	宮山山清庵	宮山山清庵	上調子 三味綿 芳村孝一 柁屋勝丸 吉治	上調子 三味綿 芳村孝一 柁屋勝丸 吉治	上調子 三味綿 芳村孝一 柁屋勝丸 吉治	

阪神沿線今津
會社
内外蓄音器商會

社主藤堂氏の

ための悪文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焔をあげて、あそこであんなことを云はればモット本が賣れたらうにご後悔をするところなご仲々うれしいおぢさんである。なんでも社會に貢獻するために本屋をはじめめたのださいふてゐるがさうかも知れない。大いに読んで（大いに買つて）このおぢさんを満足させて下さい。

|| 路 耶 生 ||

正に耽讀の好季節

古
本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南 五 六 二 番

川柳雜誌 新春號 (第四卷第壹號) 目次

感想・評論

遊戯以上……………麻生路郎 (一〇)

作品か仕事か……………川村花菱 (二〇)

技巧と氣韻……………木村半文錢 (三〇)

禁酒漫語……………安川久流美 (三六)

前奏曲……………喜田飯山 (四〇)

柳俳の峠より……………安井ひろし (四五)

川柳家の字に就いて……………正岡蓉 (五一)

川父と子……………麻生路郎 (五三)

一擲集を検す……………林田馬行 (四〇)

二柳子の熱……………黒木莢豆 (二六)

研究・其他

大太ぼつち……………岡田三面子 (一六)

音響語の句……………麻生路郎 (二〇)

樽全集の誤謬に就いて……………西原柳雨 (三三)

病中贅言

蛭子省二 (三七)

漫文書 藝術的の揉み方

岡本一平 (三八)

柳談會記

塚崎松郎 (三九)

暮の浪花座

庄萬よし (四〇)

月末

蛭子省二選 (四一)

牛肉

矢田右大臣選 (四二)

寝顔

塚崎松郎選 (四三)

縁談

橋本二柳子共選 (四四)

募集句

近畿支部聯合句會

萬よし記 (四五)

川柳書架

(五) 川柳家戸籍調

(四六)

創作

近川柳作

麻生路郎 (四七)

柳塔

松郎・美の作・葎乃・眠聲・千代二・胡陽・柳路
かほる・駒人・莢豆・飯山・萬よし・馬行・二柳子

(四八)

粒々集

省二・紋太・柴舟 (四九)

近作柳樽

諸家 (五〇)

各地柳壇

松郎編 (五一)

表紙畫 (柴谷柴舟) 題字 (小出楢重) 編輯後記

路郎生 (五二)



遊戯以上

— 遅日荘にて —

麻生路郎

久しぶりだね。まあ上りたまへ。今日は川柳の話の聞きに来たんだつて。それは少しくおかしいな。が、好きな道だ。生命がけの道だ。少々おかしくつてもかまはん。聞きたいならばいくらでも聞かしてあげやう。ところで僕は、こまわつておぐが、ラヂオでも聞くやうに、途中で寝転んだり、物をバクツキながら聞くんぢや話さないぜ。その積りでね。

「藝術の道を踏み外すものが二つある。それは猥褻と技巧だ。そのうちでも技巧の方が一層悪い」をいふことが書いてあるんだ。流石に世界の文豪だけあつて巧いことを云つたものだ。尤もトルストイ以前に、そんなことを云つた隠れたる天才があつたかも知れぬが、僕はトルストイの日記にあつたから、先づトルストイがはじめて、さう云つたものとして話すのだ。勿論僕はトルストイを疑つて、こんなことを云つてゐるのではないが、假りに僕等のつた川柳でも、僕等は自分の創作として大膽に發表してはゐるが、つたの隅の隠れたる天才が、チャーレンスも、僕等と同じ句を作つて

ノートに書き込んでゐたかも知れないから。しかし、その天才の句を發表しないやうであつたからして、それを、おそれ僕等は僕等からかなり大膽な仕事ではあるが、ごしく、發表して来た譯だ。これからは矢張りさうするより仕方ないからさう仕儀と思つてゐる。ところで僕が句を發表したのを見て、その隠れたる天才のノートを知らざる限り、人達は、その句を僕の創作として取り扱ふではないか。話が飛んだ横道に外れてしまつたが、

兎に角トルストイの日記には、さつきにも云つた「藝術の道を踏み外すものが二つある。それは猥褻と技巧だ。そのうちでも技巧の方が一層悪い」を書いてあつたのだ。

ところで、これを讀んだ僕は一應は感心したが、川柳家としての僕は其の外にも一つ殖やして三つにしたのだ。君は何を殖やすと思ふ。全く君の考へてゐることは想像外だから説明を聞く方が早いつて。さう聞く方でするゝては仕方がない。それでは話すが「遊戯衝動」だ。解つたかね。これをよせて三つにするんだ。トルストイ、プラス僕の一つの感想が出来上つた

譯だ。勿論川柳は僕にさつて藝術なんだから「藝術の道を云々」の文字を「川柳の道を云々」に取り換けても一向不思議ではあるまい。一寸云つて見るに斯うなる。

「川柳の道を踏み外すものが三つある。それは猥褻な技巧で遊戯衝動だ。そのうちでも遊戯衝動が一番悪い。」
さうだ。面白いだらう。これからのよく本論に入る譯だから、今の文句をよく呑み込んでゐてくれなさい。困るよ。でないさ話の徹底しないから。第一の猥褻が藝術をいやす此の場合川柳だつたれ。川柳を遊するこはいふまでもない、話であつても昔も問題とするまでもなからう。「末摘花」はさうだれ。一目瞭然だれ。今はさうかさいふのそれで足りるだらう。いくら治安維持法に觸れないからさ云つたつて冒瀆は冒瀆さ。

次に技巧だが、これは大いに論ずるだけのものはあるがこれは他日悉く話すして至極簡単にお話するに止めておこう。技巧は無技巧の技巧まで行かなければ駄目だ。意識してする程度の技巧は結局トルストイのいれる技巧だ。しかし、これは藝術家としての立場から見ての話だ。初心者は技巧の練習ささいふこころへ學ばねばならないのだから仕方がないさ。技、神に入るといふ言葉があるが、あれを新しく言つたのが、無技巧の技巧さ。技巧のこころは、まあこれ位にしておこう。萬葉古今新古今を並べて見たつて技巧が必ずしも藝術的價值を高めるささいふものではないさいふ事が理解出来るだらう。いよく僕らの云はんミする「遊戯衝動」だがね。僕の川柳は藝術であり遊戯以上なんだ。だから藝術衝動によるものでなければならぬさ。いふ異見をもつてゐるのだ。これは僕の異見ささいふよりも、當然さうあるべきものだから深く説明するまでもなからう。さ、こころが、遊戯衝動によつてのみ作句してゐる川柳家の一派がある

んだ。一派があるささいふよりも今の處では、さうした作家の方が多數なんだから情ない話さ。そして彼等は自分達の句が遊戯衝動の句であるささいふ、さすらいも考へて見た事がないのだから頗る滑稽な話なんだ。僕等が川柳は詩ださ云へば彼等も又同じやうに詩ださ云つてゐるんだ。右の始末だから詩さは何んぞやき聞かれたら、ギヤフンさまるつてしまふんだ。

ただ猿の眞似で、他人が詩ださ云へば自分達も詩ださ云つてゐるのに過ぎないのだ。中には比較的正直な連中もゐて「私達には藝術家ではありません。随つて私達の作る川柳が藝術であるなま」は思つてゐません。けれどもその川柳が藝術さやら云ふものものだつたら儲けのものであります」なまこ蛙は口からで眞ツ直ぐに申上げてゐるのも、ゐるのだから滑稽さ。

藝術衝動なくして生れる藝術があつてたまるものですか。さうではないかね君。こころが、私達の川柳が世に認められて来るさ彼等は急に慌て出し忽ち尻馬に乗つて、社會宣傳がさうの斯うのさ云ひ出したから笑止千萬な話さ。僕が川柳を社會に認めさせるための「川柳雜誌」を出した時に、川柳の社會化なんて、あつたはさささ連中ではないか。

世の中つて、妙なもののさ。主義も主張もないさ、賑やかさうな處へ首を突つ込んでゆくからね。もさく彼等も同じ川柳の流れを汲んでゐるんだからおかしな態度をしたからさ。憎まうたつて憎めない僕ではあるが、もつこ遊戯氣分を棄て、本眞劍になつて、ついで來なくつては駄目だ。でなければ道連れは眞ツ平だ。足手纏ひに過ぎんからね。これで大體は解つたらう。

解つたら君も變て古な享樂派の句なんか止して、ほんまの川柳の路にいそむこつた。藝術は何んさ云つても精進あるのみだからね。もう歸るのかね。ぢや又來たまへ。



二階から見るミ何度かお辭儀をし
 歩哨ふミ浅い眠りを感付いて
 一圓の貯金の出来そのも嬉し
 池の鮒あつちへ群れになつて行き
 油虫何か頻りに探すやう
 脱れ行く螢はこゝで火を點し
 六度五分七度二三分輕う病み
 蟻今日は方角變へて稼ぎに出
 居催促勝手に炭を取りに行き
 變心を恨む書置長くなり
 膝枕眺めつこなぎしてふざけ
 逆境がなかかゝ永い木賃宿
 模擬戰の擔架笑つて乗つてゐる
 兄弟かミ聞けば孤兒院首を振り
 事務服を脱ぐさくだける主人也
 母親の眼にあほらしい耳かくし
 寢轉んで疊に吸はす太い息
 エプロンを掛けて母親若く見
 デパートで要らない物を買ふ若
 風船屋一息入れて返辭をし
 妻ミ妻さちらもお禮ばかり云ひ
 風呂屋から迷うて歸る國の母
 天王寺こゝから拜む人を連れ

同 同 同 大 同 同 同 同 盤 同 同 同 同 同 島 同 同 同 同 同 廣 同 同
 七 販 ケ 池 根 島

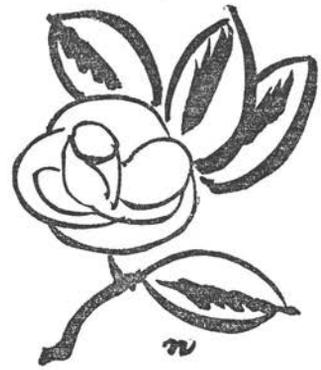
同 同 同 同 同 同 同 同 其 同 同 同 同 同 櫻 同 同 同 同 同 露 同 同
 路 象 坊 斗



ゼニアイキ僅か五錢に音をたて
 正式に貰ふた嫁は手をつかへ
 損をする店をこゝまで擴けて來
 冬來れば大根の白さにも吸はれ
 椅子へ腰おろした儘で世辭を云ふ
 戀人を逃すまいとて嘘をつく
 失戀のこの頃肩の懲りを知り
 木にあれば禁斷の實の色もよし
 吊革を持つに氣兼ねな病上り
 出養生この頃飯がうまく焚け
 淋しさは指環のあごの消ぬがたく
 眞劍な話を女給笑ふなり
 蓄音器無口が庭に立つてゐる
 おろかさを知つて知つた物思ひ
 病人が日を聞く今日の麗かさ
 將基見てゐる岡持は肩にかけ
 さうぞお取り下さい云ふ寒い店
 ふた聲はいつでも怒鳴る父であり
 事務服の友を誘つた喫茶店
 駐在所何が云ひたい暇なこゝ
 足の美にそれ程心ひかるゝか
 友達さるるのでちよつと眼で笑ひ
 婚養子費へぬ金がありすぎる

同 同 神 同 同 松 同 同 鎌 同 同 大 同 同 盤 同 同 同 同 同 同
 同 同 戸 同 同 江 同 同 倉 同 同 阪 同 同 池

同 同 吐 同 同 總 同 同 豆 同 同 椿 同 同 桃 同 同 一 同 同 屏 同 同
 同 同 情 同 同 波 同 同 蔓 同 同 薰 同 同 哉 同 同 文 同 同 三 同 同
 同 同 情 同 同 波 同 同 蔓 同 同 薰 同 同 哉 同 同 文 同 同 三 同 同



技巧と氣韻

木村 半文 錢

馬行君が、技巧の事に就いて、よく本誌で書かれてゐた。が大坂の柳界を見渡すころ、技巧派らしい技巧家も見へないではないか。番傘あたりが、まづ技巧を弄してゐる一派さ見て居るやうだが、あゝした作風は、既成川柳の作法上、ほんの末技に屬するもので、些つこも技巧を生かしてゐるものさ言へないのだ。本誌の作品なきにも、もつこ技巧があつて宜しいほぎに、もの足りない感じの句が多い。技巧なきは眞實の眼からは悪魔のやうに見へるが、然し技巧は讀んで字の如く、技の巧であるから、内容をよりよく生かすために、より適切なる表現をなしたい、この表現上の苦心が技巧であるならば、技巧は及ぶだけに施してよいのだ。が、多くは技巧さいふこゝに捉へられて、アツミ云ふやうな川柳を作つてみせるから、巧く表現せられてゐれば良いが、それが技巧仕れ、獨り天狗鼻つまみ川柳に

墜ち易いやうである。だから多くの人は技巧を毛虫のやうに厭ふのだ。併し考へねばならぬことは、能ふ限りの技巧を弄してもちもの、毒をぬき切る事である。技巧は決して悪いものではない。甘い川柳、上手な川柳、巧な川柳は、みな一面に技巧の垢をぬき切るころに生れつゝある。現在の大坂の川柳家は眞實を叫ぶと同時に、もつこ技巧さいふこゝ、即ち、内容をより適切に表現し得る程度の、技巧を研究すべきである。換言するに、餘りに技巧もない、餘りに子供だましの川柳が多いさいふ事である。技巧は作法の一要素だ。凡ゆる技巧を試みて、そして最後の純眞なものになり切らねばならぬ。芭蕉の如き技巧の天才である。彼がより能く技巧を醇化せしめたことは今更申すまでもない。

櫂聲浪を打つて腸凍る夜や涙

の時代から、南無佛草のうてなも涼しかれ
の洗練味に到達したのであるから、驚異は驚異であると共に
よく斯うした道頓を一考せねばならぬ。「夜や涙」の時代は力
限り、根限り、自分のもちものを打ち破らうとした惱みの時代
で、これをつきぬけて初めて悟入の一句を得たのである。「南
無佛の」作品の如きは、芭蕉の一句一句自分の境地が自然に接
觸して行つた歡喜時代である。句は淋しいが、斯うした作品を
得た芭蕉には、心からの作家としての歡喜がある。この時代へ
來れば寔に作家としての満足時代であらう。自分の技巧がま
までも自然に融合同化して行くところ、これが作家としての喜悅
でなくて何んであらう。「まごころの外に俳諧なし」の鬼貫が肩よ
く技巧を棄てたにせよ、彼れにも鬼貫らしい無技巧の技巧が立
派に完成されてゐる。極度に技巧を厭つた鬼貫にしても、その
人らしさの技巧を貽したことは否めない。芭蕉の如きを若し技
巧派であるとするなれば、地下の芭蕉の激怒を買ふかもしれない
が、鬼貫に比較して、そこに欺く事の出来ない技巧の天才を
認めぬわけには參らぬ。技巧の洗練味も内容さびつたり合致し
たものであつて、初めて尊敬されるべきものだ。書讀でも栖鳳
氏などは此の技巧派だ、堂本印象氏などは、この技巧の活躍時
代で、尤も今後に期待される書伯の(技巧派として)一人だ。
大阪の川柳家も、少しは驚くに足るべき技巧を弄してもよいで
はないか、もう、作法の未技であるもの、眞似川柳だの假聲川柳
などは沈黙してもよい時代だ。大阪——上方としての明快な作
風なきが、生れてもよい時代だと思ふ。いつまでも古人の足跡

を追ふては生きた技巧が誕生しないのだ。多少、棄て鉢的
な、野放圖な、技巧の試みなき研究してもよい。技巧に溺れて
内容を忘れてはならぬが、内容をより一段美しく深へさすには
鮮かな技巧が要る。短い詩であるから、この技巧の練達さいふ
ことは等閑にできないさいふよりは、餘りに大阪の川柳が作る
べき技能に劣るのか、そこに拙い川柳が並べられてゐるやうだ
これが川柳か?と思ふまごころ、まごころに他愛もない遊びをいた
してゐるやうである。最も、その人達では全力をあけての制作
であらうが、まごころに突止な川柳が多いことは争へない。
文壇でも一三頃、故有鳥武郎などは、新技巧派と稱し、稱さ
れてゐた。現在では芥川龍之介氏等錚々たる新技巧派である。
それは申すまでもなく、新しい表現法を用ひたからで、いつも
鮮かな技巧に依つて、よりよく内容を生かしてゐたのだ。技巧
の遊戲に墜ちてしまつては困るが、技の巧みさいふ點で、もつ
と劃時代的な技巧を要求したいと思ふ。子供だましの川柳末技
に終始せず、せめて大人が讀める程度の川柳を拜見したいと
思ふ。餘りにも大阪の川柳家は、のんき過ぎる。きらく過ぎる
樂しみすぎる。もつと苦しんで來ねば川柳らしい川柳も生れな
いではないか。いつも主人の型を應用して、いつかごの川柳だ
と信じてゐるごころは、その人の満足があれば己を得ぬが、他
から見ても冷々する。よくアンで満足が出来るのだな——
と感嘆する位だ。久しい間會なごにも遠く退いてゐるから眞
實の柳界の空氣は知るよしもないが、傾戴する雑誌を通じて見
る時は、やはり川柳の未技に拘泥して、お安い自己満足をして

るるやうだ。と同時に、若い作家の熱のない、力のない、希望のない、理想のない、さて安易におさまり返つてゐるのに寧ろ呆然たらざるを得ない。丁度去勢された動物のやうだ。不甲斐ないこゝ駭しい。古人や先輩に従ふて安價なよろこびを分け合ふてゐるさ、一生凡庸作家に終るのだ。少し氣の利いた獨創の技巧でも試みてはどうか、餘りに納まり返つてゐるのは、若い人の時代ではない。活躍をせねば若い人の血や脂が勿體ない。つまりぬこに血や脂を浪費することは宜しくない。今日は明日は——考へてゐるうちに、人生の過ぎ行く速度は可なり速い。けふ死ぬといふことを心に描くさ、川柳はなぐさみではなくなつて了ふ。芭蕉は一句々々を辭世吟ださ答へたさいふが、いつころか眠つても、こゝろ安らかな臨終たらしめることは、人生の最後に學ぶべき歸納點だ。こゝを何時も心に解してゐるさ、川柳の妙女がハツキリミ淨き出てくるのだ。子供だましの川柳が作れぬのは、斯うした人世に處して苦しんでゐるからである。この苦しみを突き破つたら、それが人生の最後へ來るべき歡喜時代だ。寂然として歸するが如き大往生をこけることは、日ごろの端然な心の運びを積み重ねることで、積み重ねてしまつたら、心易らかに人生を終焉して了ふのである。こゝまで來れば、川柳の技巧が何うの、眞實が何うの、四角ばらなくともよい。それは凡ゆる毒藥を吐きつゞけた最後の圓融境であるからだ。

南無佛草のうてなも涼しかれ 芭蕉
 まさに此の境地だ。鬼貫の
 涼しさは虚空に満ちて松の聲 鬼貫

も正に此の圓融境だ。無技巧をモットーにした鬼貫にして尙ほ此の一句あり、技巧豈に天れぬれざるべけんや——と申して置きたい。

話しは一轉して、日車君は當代の川柳界での新技巧派の一人である。技巧派なごいふことは、日車君の正しい主張と合致しないやうであるけれども、私はさう睨んでゐる。例へば最近の水原謙上で發表した中から

赤い實が出る貧乏を眞つ二つに
 蛭の實臍に似てゐる人の臍に
 の如きは、もつとも優れた技巧であらうと思ふ。斯うした作品を大阪の川柳家が手にかけるさ、
 人間の臍に似てゐる 蛭の實

なごい、まごに味もさはりもないものに凡化して了ふだらうが、それを作り生かすところに技巧が決して未技でないさ云ふことを論證されやう。わざとらしい技巧は未技である。この區別がハツキリせぬさ技巧は上乘なものになり切らぬ。表現法の醇化といふところに、この微妙な奥義がある。まごにこれは微妙なもので、前記の日車君の『赤い實』にしても『臍』にし

原稿紙散らさぬやうに獨鉗あり
 如きも、まさに技巧に生きた句であるが、これも大阪の川柳家なれば

原稿紙散らさぬやうに獨鉗あり
 なごい、まごに味もさはりもないものに凡化して了ふだらうが、それを作り生かすところに技巧が決して未技でないさ云ふことを論證されやう。わざとらしい技巧は未技である。この區別がハツキリせぬさ技巧は上乘なものになり切らぬ。表現法の醇化といふところに、この微妙な奥義がある。まごにこれは微妙なもので、前記の日車君の『赤い實』にしても『臍』にし

でも、一步誤るゝ危険な境地ではあるが、遠がに能く作り活化されてあると思ふ。この一步誤るゝ危ない橋を渡つて行くのが獨創の強味だ。そして先づは上手より、名人に這入る順路であると思ふ。この點で現川柳界で日車君をもつて尊敬してよいと思ふ。それは兎もあれ、呀つて仰天するやうな、技巧の大才兒が出現してほしいものだ。大人の川柳家にも感心させる上乘な作品が、さういふ川柳話上へ現はれてよいものだと思ふ。

それに大阪の川柳は、歩一步俗化して行く傾向がある。句に氣韻のあるものなき、ほんの樂にするほごしかない。もつて句の全容に氣韻が生動せねば嘘である。子供だましの川柳には此の氣韻を奪ばぬやうでもあるが、それは以ての外の謬想である。川柳の發生當初は江戸市民の洗練された生活から、俗言の中にも一味掬すべき氣韻を宿してゐたのである。この氣韻を江戸情緒といつてもよい、それは確かに一脈の氣韻である。が、近頃の既成川柳では、この一味掬すべき味がな、氣韻に乏しい幼稚だ。か凡倉だまかいふのは多く此のやうな畑に在る人に限るやうだ。川柳もさういふ俗言可なりだが、俗言をよく作り生かさなければ、ナマな、露骨な、ゾンザイな、さういふ救はれざる野性川柳に墜ちて了ふのだ。十七字の個々の文字の力が、こんぜんさして表れた時に、氣韻は宿るものである。高い香氣の句はこの氣韻が生或されたものだ。『この世では食へぬ佛が並ぶ天』一秋が立つ手紙の白き一端に」
日車
の如きものは、さうかに氣韻が高く作り籠められてゐるやう。抽句の「路の石まご如意輪觀世音」これやこの瑞穂の土の一握り」にしても、同じく氣韻は生動してゐるやう。高いリズム

が奏でられるのは、多くは斯うした氣韻を内に封じ込めてあるからだ。作家の思想が圓滿になればなるほごに、この高いリズムは躍動されて行く。

本誌で、この氣韻の宿つてゐるのは、莢豆君を以て第一位に押し置きたい。俗化川柳、露骨川柳、野性川柳、幼稚川柳、子供だましの川柳の多い大阪に於て、少しは川柳の氣韻に就て、論じ得られる程度の發達が望ましい。俗悪な川柳よりもつゞ脱俗した超俗した川柳へ歩まねば、餘りに川柳界は幼稚園すぎるではないか。幼稚園のお山の大将がうじやうくしてゐてこれが大阪の川柳界を形成し、導示して行くとしたら、その最後の懼るべきものは何んであらう？ 天狗の—さうだ巧からう先生が出来上つて了ふのだ、から寔に慎しいことであり、他愛もないことでもある。この持ちも携けも出来ぬところに納まつてゐるのが所謂選者級でも申すべきであらう。故ふざるは汝元來低能に近し—さういふ部分の人たちが多く、選者顔をいたす人々を胸に手を當し、しみじみと考へてみるがよい。さういふ慎しい、選句の罪を犯してゐるのであるが、でも、より若い人々を指導してゐるさういふのであらうか。まことに慎しいことである。選者級のこころすべき事である。殊に、同人制に依る經費負擔の代償に、選者としてかつがれることは、その人の川柳が一生を棒に振つて了ふ危險期であることを指摘して置きたい。川柳のお山の大将は、得てして此のやうな間から胎胎するやうだゆめ油断する勿れ。(年の内に春は來にけり—と思ふ日)

大太ほつち

三面子

○富士山へ大太ほつちは騷(さわ)ぎ(化)

○大太ほつちは大人國の迷子(政)

○海苔粗袋は大太ほつちの田植めき(政)

たいらほつちこ假名(な)で書(か)いたのもあり、大太(おほ)こあるから、たいらほつちこ讀(よ)むのかも知れぬ。其何者(なにもの)であるかに付き、西原(にしはら)柳雨(りゅう)氏が鯨(くじら)鮮(せん)八(はち)卷(まき)六(む)號(ごう)八(はち)頁(ぺい)に「大太(おほ)ほつちこさいふは、百合(ひやくが)若(わ)大臣(だいじん)のこころである、さいふ一説(いっせつ)が、紫(むらさ)の一本(いっぽん)を引用(引用)して嬉遊笑覽(きゆうぎうせうらん)に載(の)せてある曰(い)く、百合(ひやくが)若(わ)は九州(きゅうしゅう)の人(ひと)にて、肥後(ひご)八代(はちだい)に百合(ひやくが)若(わ)家(け)あり、大臣(だいじん)は大人(おとな)の意(い)にて、世(よ)に云(い)ふが如(ごと)き貴人(きじん)に非(あら)ず、大力(たから)にして強弓(きやうきゆう)、又能(また)能(よ)く磔(つ)を打(う)つ、ほつちこは磔(つ)さ云(い)ふ儀(ぎ)なり、文海(ぶんかい)島(しま)にて鬼(おに)を

平(ひら)ぐるこころ、舞(まひ)に作(つ)れり。又(また)上州(じやうしゅう)妙(めう)義(ぎ)山上(さんじやう)に百合(ひやくが)若(わ)の足跡(あしあと)さ矢(や)の痕(あと)あり、云々(くく)こ記(き)された。

頃(ころ)日に成(な)つて、川柳(せんりゅう)歳時記(さいじき)の著者(しゃくしゃ)安藤(あんどう)女戒(にょけい)法師(ほうし)から、次(つぎ)の示教(しきやう)を受け(う)けた。

生(なま)一人(ひとり)獨占(どくせん)するの(の)が勿體(むたい)なさ(なさ)に、其全(そのぜん)文(ぶん)を公(こう)にする。

高田(たかた)與清(よと)橋(はし)「松屋(まつや)筆記(ひき)」卷(まき)の五(ご)に左(ひだり)の記事(きじ)あり。

ダイラボツチの足跡(あしあと)、武藏(むさし)相模(さご)なごの國人(こくにん)が常(つね)に、ダイラボツチこて、形(かたち)大(おほ)なる鬼神(きじん)のやうに云(い)ひあざむものあり、相模野(さごのの)の中(なか)に大沼(おほなま)こ云(い)ふ沼(ぬま)あり、それはダイラボツチが富(とみ)士(し)の山(やま)を脊負(せお)はんこせし時(とき)、足(あし)を踏(ふ)みし跡(あと)なり云

ひ、又(また)此原(このはら)に藤(ふじ)の絶(た)えて無(な)きは、其(その)の折脊(せき)負(お)ひし繩(な)の切(き)れたれば、藤(ふじ)を求(もと)められざる無(な)かりし故(ゆゑ)の因縁(いん縁)なり云(い)言(ご)傳(でん)へたり。笈埃(あつち)隨筆(ずいひつ)にも、大太(おほ)法師(ほうし)が足跡(あしあと)云(い)ふこころを記(き)したり、與清(よと)按(あん)に、台記(たいき)久安(くわん)二年(に)西(せい)一(いつ)二(に)四(し)五(ご)年(ねん)九月(くわ)二十(にじゅう)七日(にち)の條(じょう)に、此日(このひ)詣石山(よぎいしやま)云(い)云(い)、見園(けんい)伽(が)井(い)、乘患(りやうわん)曰(い)く、道場(だうじやう)法師(ほうし)以(も)爪撥(つめは)出(だ)此(こ)水(みづ)、又(また)有道場(だうじやう)法師(ほうし)屐跡(きせき)井(い)一(いつ)二(に)石(いし)。こ見(み)る、本(ほん)朝(あ)又(また)梓(し)、日本(にっぽん)靈異(れいぎ)記(き)、舊本(きうほん)今(いま)昔(むかし)物語(ものがたり)語(ご)なごにも道場(だうじやう)法師(ほうし)が怪力(かいりき)のよしあれば、其(その)頃(ころ)世(よ)にこころしく言(い)傳(でん)へけん謬(ご)が今(いま)仍(なほ)田舎(いなか)に残(のこ)れるなるべし。

女戒(にょけい)法師(ほうし)附記(ふき) 横濱(よこはま)市(し)磯子(いそこ)町(まち)眞照(まね)寺(じ)の裏山(うらやま)は、萱(いよ)のみ茂(さ)りて樹木(じゆもく)無(な)し、昔(むかし)ダイラボツチが向(むか)ふの地(ぢ)〔女房(にようばう)〕に踏渡(ふみわた)らんこして尻餅(しりもち)を突(つ)きたる故(ゆゑ)、樹木(じゆもく)を生(せい)ぜざるなり云(い)、古(こ)老(ら)云(い)へり。

粒々集

皆古し

朝鮮 蛭子 省 二

張板を迂る末の子憎まれる
飴玉をかみ煙草の火を探す女
ニコライの門を覗けば人が歩む
一圖に露西亞の話をき、朝寢する
泣くべき膝に靴下をあむ恨み
いさかひは皆古し隣の子を抱く
十二月新内をきく群に入り

近作

神戸 相元 紋太

責任に初めてさいふ肩の凝り
女房のうつ釘みんな仆けるなり
子の寢息氣のせいでなく早過ぎる

大根高う干され沈みきつて居る
更けて來た街に異人が多過ぎる
八燭の一つつきりへ患者待ち
醫者古う流行るでもなく住んでゐる
口開けて寢てるを聞いた當惑さ
よく流行り煙り爨く洋食屋
生姜湯を呑んで寢なさい一人つ子
馬鹿長い笛で踏切二つ越し

その折々

魚崎 柴谷 柴舟

晩秋(二句)

落葉かいて夢の黄金を思ひ出し
あの枝に去年の繩が残つて居

晝前の風呂(三句)

をなご湯におしろい破つた音のする
をなご湯で宅がく、ののろげやう
女湯でお辭儀してそな聲がする



二柳子の熱

黒木 莢 豆

二柳子の句は地味で目立たない。うまい句を作つて他人をあつし言はず底の人々の群からみるに、二柳子の存在を一つの不可思議な現象と思ふかも知れない。こゝほ左様に二柳子はうまい句を作らうとしない。彼れの句は依然として地味で目立たない。

けれども凡そ世の中に執着のないところに努力は存在しない。私は彼れが生活のほんご過半を川柳宣傳の爲めに捧げたるその偉大な犠牲的努力が、彼れに何を報いつゝあるかといふ一事に對して久しく凝視をつけてゐた一人である。

二柳子の句が單なる道楽的趣味や自己陶醉の類でないことは彼れのこの態度をみても知ることが出来る。然らば彼れが如何なる句作態度を持して如何なる句境に遊んでゐるかを知ること一つの刺激であらうと私は信ずるのである。以下稿を追うて

君の業績の一端を抄録しつゝ批評を加へることにする。

彼れは所謂善良なる日本人である。彼れは所謂温順なるプロレタリアの一人である。彼の人生觀は努力一貫主義である。努力即安心である。

鶏もしきりに餌を探してゐる
首を振る程には鳩の拾はれず
旅立の草鞋一足きつく踏み
飲みすぎた朝仕事着は黙つて居
澤山にないが隣の子へもわけ
幸福を幸福させず忘れてゐる
現金をにぎり我家へいそぐなり

これらの句には分限に安んずるさいつた風な君の人生觀がよく出てゐる。これらにはまた、雪や寒風なきの自然の暴威にさいなまれて来た北國の人特有な運命に對するつゝましさを根強さが出てゐる。

經を讀む中へ街から戻つて來
病上り秋の田へ文持つてくる
燈明を明るく拜む旅戻り

の句からも北の國の人らしい心のしづかさ、安息所として
の家に対する異常の執着をみせてゐると思ふ。かうした氣持
の人が故郷をはなれてゐる故郷を深くなつかしむ心もわかるで
あらう。かつて本誌の戸籍調欄で

夕暮を空地へ出るのが里心 路郎

を好む句だといつた君の心境がうなづけるわけである。君が歸
省したときの句に

家があり田があり水の音がする
山からの水水漕を越してゐる
巢をさがす雀ふくらむだやうに

冬の金澤にて

犀川の水突當り寒當りゆく

こいふのがある。如何にもフレツシユな心で故郷の山河を眺
めてゐる。そこに北の空を思はせるやうな透徹した詩境がのぞ
いてゐる。雀の句などは一寸言ひがたい句であると思ふ。

君の行き方としてはこちらかこいふと變つてゐる方であるが
君にはめづらしく聯作らしく取扱はれてゐるものがあつたので
抜いてみる。

すゝりなくこいふに金魚が光つてゐる

(評 子供のときの憶ひ出か)

看病の窓に金魚はひるがへり
妾宅の庭には知らず金魚は泳ぐ
灯の端に金魚は光つてゐる

これらの句は君の感覺的な一面をよく現してゐるやうだ。面

白ではないか。

玩具屋の虎だけ首を振つてゐる
淋しさをます物干場笛をき
逃けるが如く月光の高くなり
花の咲く道へ子供をつれてくる
一雫井戸一面にひびくなり
帆なごおろして港の夜になり

寫景の心境がびつたりと融合して鮮かではないか。君のいつ
かな目も寂しい詩境を裏書するに充分であらう。物干の句には
貧しい家庭の愛情といつたものがしつくりと出でゐる。花の咲
く道への句にもさうした家庭のしづかな親の愛が心ゆくまでう
たはれしめる。最後の港の句の中にも働いたあまの醜態を知
つてゐる人のもつうれしい詩趣がゆたかにかたられてゐる。

君はまた君らしいつかぬ眼をもつてよく人情の機微にふれ
た句をみせてゐる。そこには激情的な熱いくちづけはないが、
しつかりした甘味のある思ひやりが、ちつとだきしめてゐるや
うににじみでゐる君はこゝまでも強い陰性の情熱の人である

子供達ふざけて母へ突き當り
人ごみへ女の聲のつゞくこ
隣の子いなすに菓子をもたすなり
見送つた後灯をふつと消し
偽らぬ妻を時々吐くなり
あつちへ抱いた子の儘になり
近所の子等とお父さんを通さない
落ちてくれなご母親下にゐる

これらの句を讀んでゐるさいつしか二柳子と言ふ人がなつか
しい人に思はれてくるではないか。そこに善良な夫があり子

煩悩のお父さんがあり好きなおつちやんがあるのだ。然らば君はたゞそれだけの人であらうか？ 否決してそれだけの人ではなかつた。

長屋の熊公八公にだつてそれだけの人なればざらにあるであらう。それはしかしすみだのつうだのいって期間振る或種の自稱川柳家なきよりもけつかうなこゝではある。筆が大分岐路に入つたやうであるが要は人格の背景をもたない句はいくらうまい句でもひまつぶし以外になにもないと言ひたいこゝに外ならないのであつた。二柳子はうまい句を作り得ない點に於て自他ともに許すほどの人である。しかも彼れが句會の席上なきで作句には超然として作句者の世話なきをやいてゐるのをみて心ひそかにうたれてゐるのは決して私一人ではなからうと思ふ。そこには彼れの確固たる信念のこゝに一貫した態度があるのであらう。彼れの句境は決して一時の作句氣分の裡に醸し出される底のものではないのである。

牛さ私たゞ黙々々黙々々

路 郎

の句を思ふたび私は二柳子の姿を思ひ浮べるのであつた。彼れが日々の生活を生活しつゝ、魂の聲にちつと耳を傾けてゐる姿が私の目にはあり／＼と映るのであつた。彼れの句の有難さはなんといつてもそこをはなれてはないのである。エクス……皮も身もしほつて棄てたエクスを思はずものがそこにあつた。



卒直そのものやうな簡潔な句の姿がそこにあつた。あなたに子があつたは思はなかつた。頂戴いへばなんでもくれるなり。近所の子等らにお父さんを通さな。酒に辨當を嘗ひうら／＼かな日なり。曲るゝ私の姿が消へる道なり。現金を握り我家へ急ぐなり。服脱けはもう膝へくる女の子。あければ限りない程かうした句が出てくるのである。これらの

句の快さは對照をしつかみつかんで後棒ゆるぎもしないこゝである。がつしり三四ツに組んで角力つてゐるこゝである。そこに一味掬すへき痛快な新しさがあるではないか。君の句の不満な點もこのあたりにあるのであらう。君は今芭蕉の虚實の訓なきを聴くべきではなからうか。こゝにかく芭蕉の句の技巧なきは彼れの學ぶべき點であると思ふ。

だがしかし芭蕉の虚實の訓へなきも、島のもの座敷で座禪してつくれは言つてゐないやうだ。島の句はこゝまでも島の中で生れべきであらう。島の句を蹴の形もしらない人が作つて得意がるなきは標本室の硝子戸の中で南瓜がなるよりも奇異な現象でがなあらう。二柳子の句の強みは何といつてもしかく眞剣な體驗の聲であるこゝである。こゝから一步踏み出すには、この虚實の訓へに耳を傾ける必要があるらしい。一旦これをむなくするといふこゝも、つかず

近作

麻生路郎

孝行はいゝが男がしなびて來
まづしさをこぎもの方が覺いて居
ポーナスで父の腕前疑ふな
ひさりひさり雑誌をあたへ冬を越そ
木棉着でおごそかな父となりおほせ
箸紙を父おちついて書いてやる
何はなくとも男の子等冬を越し
雇はれてゐれば叱られ初めもあり
光明のなかにひたつて餅をやき

近畿支部聯合句會

十一月二十四日夜
於 日本橋俱樂部

かねて計畫されてゐた近畿支部聯合句會が各支部幹事の斡旋に依つて華々しく開催された。兼題三題のほか川柳界には珍らしい清記互選の試みがある事にて馳せ参する者多く、さすがの日本橋俱樂部も狭い心地がした。當夜は珍らしい顔觸れが多かつた許りでなく、句會に初めての人々が多數参會せられた事は嬉しいものゝ一つであつた。かねて兼題『嵐』の選句をお願いしておいた路郎先生は、當夜生憎風邪で臥床、出席不可能の旨申し越されたので已むなく馬行氏はを代選、大がかりであつた清記互選も参會者の鋭敏な選句眼に驚くべき短時間に完了互選の合點發表に多人の興味を呼んで十時十分盛會裡に散會した。尙當夜桃谷順天館、サンエス本舗、西本三笑、安井ひろし、北山悟郎、駒井美の作の方々から多數の御寄贈品をうけた事を幹事を代表して感謝して置きます。尙當夜の出席者は左記の人々であつた。(萬よし記)

源太、美の作、游二郎、松郎、文久、舟人、睡花、素生、幽香、嶺月、悠々、刀三、素人、玄水、靜雲、笑、鮎美、多聞、枝呂、木人、青影千、越浪、有枝、慶太郎、毒仙、ふなん人、波郎、翠峯、博久、啄舟、三斗、紫朝、聞路、ひろし、二葉、山雨樓、露歩、川洞、一醉、椿薫、加香、百雷、山花紅、かほる、秀哉、武、三笑、三平、祇梵、彩秋、番外、飯山、双柳、松原、馬行、萬よし。(計七十名)

おちぶれて嵐の中の門に立ち 幽香
 ずぶぬれに濡れて嵐の見張りも 文久
 寺男よべの嵐を掃いてゐる 悠々

廩落は嵐の中を宿へ着き
 物語り嵐ミなつて夜に入り
 嵐の夜ロイド眼鏡のまぎろしく
 ストープを焚いて嵐の夜ミなり
 大荒れに歩哨へ光る 堀の水
 廣告塔嵐に一つ二つこれ
 それらしい船が嵐の中に見え
 だんくミ嵐に聲が高くなり
 はね釣 瓶嵐のおごの忙しさ
 軒店のもう山にしてしける事
 せらぎの崩れたらしい嵐の夜
 嵐過ぎて飼犬を抱き上げる
 嵐する今夜機會を見がさず
 孝行の素足に風吹きまくり
 嵐の夜女が二人おびぬきり
 締め切つた汽車が嵐を突走り
 跳の子嵐をついてひた走り
 船着場嵐の中に灯つて居
 寝不足な顔で嵐を話し合ひ
 嵐の夜神經質に何か聞き
 住職の嵐を知らぬ様に寝る
 暴風雨手紙は書けんじまひなり
 嵐の背大根賣りに欺されし
 大嵐四ッ橋に人散つてゐる
 大嵐子の前掛が干したまゝ
 無茶苦茶な嵐に宵寝してゐます
 水平の土へまんなるう風吹く

祇梵
 鮎美
 かほる
 冷笑
 ひろし
 三平
 博久
 川洞
 紫朝
 萬よし
 三斗
 双柳
 青影子
 同
 隊舟
 同
 嶺月
 同
 南枝
 同
 波郎
 同
 松郎
 同
 紋太
 同
 游二郎

驛(席題)

互

選

驛出來て舊街道の餅賣れず
 この驛の名物みんな買ひ集め
 驛一つまだ大阪の煙が見ゆ
 驛名をさかさまに讀む汽車の窓
 田舎驛異から這入る事も出來
 急行の停らぬ驛に五年住み
 鞍替の身に驛の灯の濡れて點き
 驛長の手でコスモスが咲いて
 人力車一番汽車へ寒う來る
 驛賣の一人は風邪の聲であり
 拾年も今も變らぬ驛に降り
 この驛で一番古い仲夫に乗り
 驛までは母の情の重たすぎ
 驛前の仲夫腕を組み腕を組み
 驛前の宿で泊つて疑はれ
 逃げて來て驛のさもしの明るすぎ
 驛の灯が札所の樹に見ゆるだけ
 驛前のタクシー歩く邪魔をす
 連れてあるだけに青を買ひ
 村の驛お酒を造る米を積み
 驛までは送り得ざりし母なりし
 ブラットを見るこ出迎へ人見多
 待ち合す驛をうつかり乗り過し
 まだ泣きに出る氣入場券を買ひ
 驛へ來てぢやおお事に
 構内のじよれんのあごも涼し
 いるけなない笛で驛長別れさせ
 ブラットに親子三人無事な顔
 睡花

自轉車の兩手離して夜學へ來
 荷造りの怪我を夜學で尋ねられ
 夜學校ギョギョあいて一人殖ゆ
 (佳)寝たりるた子夜學へ來なぐ
 (佳)往きがより夜學の喧嘩分けてや
 (佳)夜學を歸り四五人越そ寝る
 (佳)職場をばふたれ夜學で立たな
 (佳)夜學の灯屋根の猫が飛んで下り
 (佳)夜學の繪の好ま子叱られる
 (佳)夜學只今露路の風が入り
 (人)資本金千圓也夜學始まる
 (地)早ければ早いで夜學疑はれ
 (天)雪の日の夜學をも強くみる

鐵砲 美の作選

鐵砲の音に湖畔は黄昏れる
 鐵砲も重く演習町へ着き
 鐵砲は欲しいと思ふ雉が飛び
 鐵砲はこら邊りを探させる
 獵銃を仲居あつさり床へ置き
 鐵砲の上で鳶が輪を描き
 鐵砲へ犬むくく起きて來る
 鐵砲は一二三で肩にのり
 鐵砲に今日も家令は引づられ
 立て掛けてある鐵砲を危ながら
 鐵砲の手入れに犬へ夜が白け
 (人)敷島へ鐵砲の手は伸びる
 (地)獵姿戀する身は思はれず
 (天)鐵砲的に小鳥は歌つて居

文久 二葉 悠々 飯山 助六 馬行 秀哉 游一郎 秋三 同 刀三 水鏡 一醉

鼠の朝第一番に登校す
 (佳)金策の見込も立たぬ日の鼠
 (佳)鼠の夜云ふてるこへ父歸り
 (佳)JOKK外は鼠の吹きまくる
 (佳)ロケーション不意の鼠を景
 (佳)鼠から家主機嫌を損じたり
 (佳)仕舞鼠呂巾の中を一人來る
 (佳)この俺にいつそ鼠の吹けよ
 (佳)鼠の毒な人が住居の屋根が飛び
 (佳)鼠の夜丁稚のほかは起き
 (人)鼠の夜人を起しけつまつき
 (地)大嵐祖先以來の家で寝る
 (天)タブレット嵐の線路事故
 (軸)嵐鼠父は煙草を喫うてゐる

夜學 松郎 選

夜學生標語募集が眼に止り
 夜學から歸るこ安治川の註文
 誓文に夜學を休まねばならず
 夜學校は休み親爺氣がつかず
 夜學校おつさん矢張り讀ませ
 夜學ふこ課長の辭を思ひ出し
 寒いですなこ夜學の教師
 卒業の其日夜學は羽織で來
 椅子寒う夜學の足を組み直し
 草疲れた尻を夜學に低うかけ
 號外に一人が歸る夜學校
 册輩の下駄を夜學は揃へさき

同久 文久 山岡樓 嶺月 双柳 水鏡 秀哉 鮎美 素人 舟人 同人 飯山 馬行

同人 文久 山岡樓 嶺月 双柳 水鏡 秀哉 鮎美 素人 舟人 同人 飯山 馬行

雜吟 清記 互選

(十九點)幽香(十七點)冷笑、馬行(十五點)枝呂(十三點)啄舟(十一點)閑路(十點)文久、秋三(九點)一醉、刀三(八點)紫朝波郎、青影子、南枝、秀哉(七點)一路、松雨、突支坊、越浪(以下略)

十五點句

出勤のあさは日向があるばかり 馬行

十二點句

氣まづさの中火鉢火はいこり 幽香
話したい手紙で逢うて歩くだけ 冷笑

十點句

親一人子一人影を踏んで行き 秋三
さて何を氣でもないあごの髭 枝呂

七點句

耳打ちに次々相が崩れて來 啄舟
こほろぎ添乳のやうに鳴と呉れ 松雨
父親に似て母親を苦勞させ 閑路

六點句

やけ糞で吞むは五勺に足らぬ酒 啄舟

五點句

貧乏はお互様の嫁を取り 一醉
催促をする方でも嘘を言ひ 山雨樓
失業の父へ日毎に子はなづみ 越浪

四點句

納得はうなづくだけの女の子の文久

返事しただけの臺所音がする同

自由講の描く日の丸は敵もなし紫朝

たのもしく落葉へ人の氣配する同

腕時計處女の誇りが疑はれ山花紅

國舉げて葉山の空が氣にかゝり彩秋

帶の端亭主の前でひるがへり南枝

それもなく片輪の戀は哀れなり枝呂

父三母わが子の事で飯がすみ刀三

肩掛に嘘を包んで逢ふてゐる幽香

境遇を眺ちて働き抜く男青影子

何が氣に入らぬか倅むつゝする冷笑

丹前で持つゝ煙管は細く見ゆ波郎

三點句

ごみ溜を漁る男の卷裏 突支坊

追付いてお辭儀をしてる一年生 同

夕刊屋傘から傘へ一つ賣り 秀哉

ボーナスを服屋方も待ちあぐみ 同

從娘ご二人おかれて黙りきり 素人

洗ひ髪嬉しい噂上に聞き 波郎

あしたから氣張ることも早く寝る 一醉

半分は資本家肥や汗をかき 萬よし

たまに見る母の白髪もなつかし 幽香

針さ糸しばし嬉しい時が過ぎ 一路
それ程の度胸があつて泣く男 閑路
戀人を淋しがらせる程の金 刀三

筆ちびた便りが冬をうなづかせ 百雷

二點句

病人も醫師も黙して意識する 南枝

置場まで石炭すこしづゝこほれ 同

寒念佛堤の風を輕う受け 青影子

木賃宿歸るゝ刑事來た話 同

失戀の此頃フケの多い事 一文字

うつかり鏡に惚れる女形 同

吸入器笑つてならぬ睦じさ 一路

釣革をハンカチで持ついゝ娘 同

演習で雀度胸が太くなり ふうなん

ハア／＼喋べらしてゝ人格者 刀三

疊にもよい智恵のない前後策 松郎

姑が入齒を落す好い機嫌 山花紅

黒めがね誰をか待たす姿なり 祇梵

踊れ／＼死の緞帳の下りる迄 素人

踏みさうに土瓶をよける梯子段 紋太

格子の間灯がはつきりさ京の冬 かほる

資本家のやうな氣持で金を貸し 秀哉

そばかすの女に戀の續く歳 文久

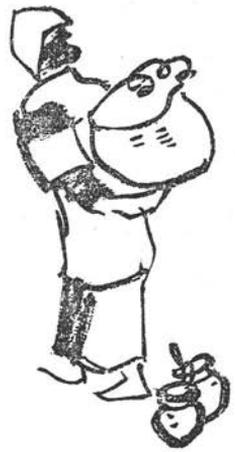
二階から返事を長う引いて降り 川洞

添寝する妻へ聞いてる水加減 山月

泣いて／＼も一日を生きのびる 双柳

幸せを市場歸りの籠に秘め ひろし
伯父さんの口では嫁に呉れる筈 馬行

(二點句以下略)



作品か仕事か

川村花菱

思へば朝顔の如き自分ではある——と、こんな事を此頃になつてしまふと考へる。親友であり又喧嘩相手であつた村田正雄氏に逝かれてから私は全く脚本を書く氣もなく芝居をする氣もなくなつた。そして又畏友伊東夜叉郎にたはれられてこの方全く川柳を作る事から遠ざかり、夜叉郎が死んで仕舞つてからは更に更に川柳と自分とは縁の薄いものになつて、毎月送つて

もらふいろくの雑誌を見るに、川柳の作品そのものが丁度、短歌をよみ俳句を見るのと同じやうに、自分の世界から全然はなれた様式の藝術さか思はれない。すがりつく杖なり柱なりがなくては、此私には一本立ちに育ちのびて行く力が本當に無かつたのだと思はれる。

何ものにも冒されず、煩はされず、そこに独自の天地を形作る既に藝術の生がある筈であるが、他力をたのみにはかなくも自己の小才をひけらかして居た私は、脚本家さしても川柳家さしても取るに足らないものであつた。

川柳詩社が盛んであつた頃、同人の句は各々その特色ははつきりして居たが、一様に傳統的川柳の本格になつた作品が多いやうであつたが、その中でこもする私の句は主観的に流れ

時に同人の笑ひを買つたものが多く、あるひは迷ひあるひは行きづまり、足元の定まらない時に、獨り夜叉郎だけが、私の心境をじつと見つめてくれて、前途の光明をかゝけて居て居た忘れもしない、須田町の『ほかけ壽子』二階の句會で

此夏は北海道に行く氣なり
の句を吐いた事がある。私には此の句は創作ではなくむしろ

石川啄木の歌
新らしき背廣なき着て旅をせん
しかく今年も思ひすぎてき

の心持を、川柳として表現したつもりで居たが、同人十餘人誰一人認めてくれなかつた中に、互選の結果夜叉郎丈は此の句を氣に入つた句として、天位に取つた事がある。私は、句そのものをほめられたから云ふのでは無い、諷刺も夜叉郎には作者を理解する力があつて、作者の傾向をはぐみ育て、行かうとする態度があつたに信じて居る。彼は私に取つて師匠であり力であつた。村田正雄亡き後に私は脚本に筆を染めながら、その演出効果を想像して全く見當がつかないやうに、川柳を作

る時、現在私の眼の前は全く暗黒のやうな心持がする。
恚した氣持の時、私は數多くの川柳雜誌を見て、行くべき道を定めやうとするが、そこに私は却つて悲しみの他何等の力も感じられなくなる。

現在數多くの川柳雜誌を見るに、先づ二つの様式に大別する事が出来る。その一は古句研究の一念に精進し一つは雜文雜誌の眞似事である。もしそれ眞に我が意に近いものさし云へば只一つ「川柳雜誌」が、柳界のかてさなるべき素質をそなへて居るさ云ふに過ぎない。

『文藝春秋』生れて以來、眞似の雜誌は雨後の筍さ生れてはつづれて行つた。そして、その影響は一般雜誌の編輯の態度を變へ、文章の調子さその目的さ上づつた小才子的のものさした。川柳研究の諸雜誌の内容が雜文雜誌に近づいた事は決して向上でも名譽でもない、むしろそれは墮落であり卑しむべきものである。試みに小雜誌の編輯後記を見れば、發行部數の事うれ行き、事、排他的言辭さ黨同伐異の偏狭さが六號活字にあふれて居る。私はこれをなさげない事に思つて居る。そもく内容を以て戦ふべきもの、作品の價値を生命とするものが、今やこもすれば、雜誌經營の仕事をほころものになつて、仕事上手さ實れ行きが、最大の目的であるやうになつては、この先々が案じられてならないわけである。これは、芝居が單に宣傳本位の仕事さ化し、舞臺が日に日にすすんで行くのに似たもので、私共眞の作品を愛するものに取つて此れ程悲しい事は無い。

指摘してきれさ云ふ事は出来ないが、現在の川柳界の一部にたしかに此の傾向があると思ふ此の傾向さは即ち川柳の仕事化で

ある。云ふまでもなく、川柳に精進するものさ心持は、川柳の向上發展はのぞましい事だ、その目的に向つて進む所に單に作句ばかりでは自己表現の満足を得られないのであるから、宣傳も仕事も當然よろこばしいものである。が私の云ふ所は、第一義第二義の混同から生ずる不平均の傾向を難するのだ。作品よりも仕事に其中心が置かれ勝ちの危機を云ふのである。句會の盛大を唯一つの勢力さ通信し、企ての大看板を度々かかゆる事によつて、川柳が社會的にも藝術的にも發展したと思ふ人々の誤りを、雜文雜誌の編輯後記にたさへ度いさ云ふのである。古句研究は一二の大家をのぞいては、單なる趣味に墮し易く、宣傳本位仕事本位の柳界は、ますます川柳をくだらないものにして仕舞ふ。夜叉郎の言葉をかきて云へば「廣げるよりも深く堀りうがすべきである。そこに川柳の生命がある。劃時代的作品の出現が、凡てのものさ解決である。

川柳に遠ざかる事數年の自分が、恚した一文を筆する事は、まごさにおこがましき次第であるが、例年新春をむかへるに際して一度が過去をふりかへつての思想である。誰れに對しての非難でもない。只川柳を愛するものさ言葉であり愚痴である。

十一月下旬、下阪を機會に路郎氏を訪ねやうと思つたが、用事の爲に本意なくも歸宅した所、今日路郎氏病臥の報を得て、此の一文をなぐさめのをよすがにもさ深夜に筆をすゝめたものである。

漫文畫藝術的の揉み方

岡本一平

僕のごこの息子は頗る藝術家で心に叛く事は決してしない方だが、ごういふ氣持ちの動きか時々肩を揉んで呉れる。揉み方が尋常でない。筋の急所々々を擱んで痛さが八方へ響くところに興味があるらしい。

「おとうさん、意氣地無しだな」

ごいひ乍ら追つかけて痛い處を擱みにかゝる。要するに人間の神經の感覺が八方に連絡してゐる不思議さを手觸する事と、父が悲鳴を擧げて意氣地なしになる處とに子供の興味があるらしい。

尤もそれをやり乍ら、しきりに健康の忠告もするから、その方の

誠實な親切も相應

にあるらしい。親

馬鹿は息子が自

分に對し、相應

に分量の多い心

の持主である證

據を發見出来る

として、この按摩を悦ぶ。

「イタイヨ〜」と意氣地無しに成り乍ら。





音響語の句

句作上の常套語法 (五)

麻生路郎

鉄巻てつまきか伊達巻いただまきかステツキステツキかッ、
ある階級かいきゆうの人物じんぶつを代表だいひょうするやうに、音響語おんきやうごの用もちひ方かたによつては、その物を音響語おんきやうごが代表だいひょうする場合ばいあひもあり、たゞへ直接代表ちやくじやくだいひょうしないまでも、そのものゝ内容ないようをはつきりおぼしめ想おもひ浮べしめるだけの力ちからをもつものである。

子こども等らが長ながくつながつて汽車きしやごつこをする場合ばいあひ、それが何等汽車なんらきしやの形かたちをなさずとも、ピーツピーツといふ語ごによりて、汽笛きしやく

を想おもはしめ、シユーツ、シユツシユシユ、シユツシユシユシユツシユシユといふ時に汽車きしやの進行しんこうをうなづかせ、ゴーゴーといふ時に鐵橋てつきやうにさしかつた事ことを感じしめる場合ばいあひ、千萬まんぜん語ごの説明せつめいよりも僅かな音響語おんきやうごが、いかに力強い働きちからづかいをなしてゐるものであるかわかるであらう。

しかしながら、僅わずかに十七音字しちおんじの川柳せんりやうに於て、音響語おんきやうごがそれほご役立やくたつものであるからうか。名詞なごしや形容詞けいごうごや働詞はたらきご以外いそに副詞ふしご

こしての音響語おんきやうごまでもさしはさむだけの餘裕よゆうがあり得るだらうかといふ疑問ぎもんがおこるに違ちがひない。が、古句こくはその可能かのうであるこゝを私達わたくしに示してゐる。しかもリズムの上うへにさへ共通性きゆうつうせいのなだらかさを持ち、ゴーゴーといふ音響語おんきやうごが汽車きしやが鐵橋てつきやうにさしかつたこゝを想起せききせしめるやうにその句境くけいを髣髴ふふつたらしめ、翻如ほんじゆたらしめる働きはたらきをなして、十七字詩しちじしの價値たかひを高たかくらしめてゐる。

誹風柳樽全集

の誤謬に就て

西原柳 雨

ろく七人にのぞまれて嫁はじめ 二三、四〇九、下段

原本にもさうあるりれき六七七を合はせて琴の十三絃を寓した狂句式であるからろく七人は六七人さありたきものと思ふ。

止みきつて居ざりこびつこ門を出る 一三三、四二二、上段

此句は東寺の中納言資朝を咏める句なるべければ居ざりはるざり若くば覺させねば是では大變解しにくい
三つみねの犬にも負けぬたいこなり

只下五のたの字に濁點が無い爲に殆んご解らぬ句も成つてゐる

此句は「三峰の犬にも負けぬ大根也」即ち三峰神社の盜難除犬の御守よりは大根の方がましである、例の徒然草の大根武者を咏んだものである。

浦島はかくでも書いたやうに成り 二四、四三三、上段

原本にもかくとあれども是はかく即ち額であらう、韋証が高樓の額に文字を書いて頭髮一時に白化した云ふ故事を結び附けた句。

味噌こしてからは岡場の袖の梅 二四、四三五、上段

てからはでかふの誤、袖の梅は吉原名物の中に數へらる、醉覺ましの妙藥である、されば岡場の下等見世では味噌澀を持つて醉覺まし即ち豆腐殻を買つて来て味噌汁をこしらへるの意秋葉はなふるこんぴらは見るばかり 二五、四五一、下段

なふるはれうる即ち料理をするの義にて葛西太郎の鯉料理である、尤も金毘羅の見るばかりは虎の門の琴平社にて放生會の放魚なごありしかと思はる、尤推想なれども「本國は丸龜江戸は放龜(文化)」は大に參考に供すべき句かと思ふ。

會我になる前春宵に梶原 二五、四五五、上段
原本の文字不判明なれども前表にあるを誤讀して前春と翻刻せられたものらしけれ、前春では何の事か解らぬ、此句は明日はお花見 萬一降つたら二丁町の春狂言云ふ豫定の處前晚に梶原虫か出たので果して翌日は雨降で御芝居も成つた云ふ場合そろく會我に梶原の結び云つたやうな狂句型が出て來たのである。

看病のやうに寢釋迦の箱を置き 二六、四六七、上段
誤讀が故意かは知らぬが原本箱を置きとあるのに箱を置きと直してあるのはさう云ふ積りか、此句は佛師を咏んだものであれば箱でなければ意義が通ぜぬ。

あくる日の群集は聞いて來たの也 二六、四七〇、下段
原本も此通りであるが、是では場所を人々を治定することが出來ぬ、思ふに來たのに北野を暗示せた狂句式であらう、な

さうなれば是非きたの假名にて書いて置きたいと思ふ、北野の天神にある左甚五郎が頼んだ時鳥の額が歌の功力によりて一聲鳴いたさいふ有名な談がある。

ちんがらにしいく土用過ぎも干し 二六、四七三、上段

原本にちんがらにこあるをにこした爲にたつた一字の事で全然無意味の句になつて仕舞つた、此句はびつこの持參嫁が一日に干し盡せぬ程の衣裳を持つてゐる事を詠めるものである。

雨には鳥帽子狩衣は月にやり 二八、四九七、下段
月は風の讀み違ひ、須磨の中納言を詠める句である。

禪寺切つて歸るのは無一物 二八、五〇四、下段

切つては切りでの誤り、禪に達磨の無一物を結んだ趣向にて正燈寺の紅葉兒を詠んだ句である。

九月咲く藤は十一日さかり 二九、五一〇、上段

さかりはさがりの誤り、只濁點の有無だけなれどもさかりでは花盛りと間違ひ易いこれは九月十一日より同二十一日迄十一日間芝明祭に實る千木箱に描かれた藤の花を詠んだものであるからさがり即ちぶら下りの意に解さねばなるまい。

あけろくを打つたで豆腐屋解せず 二九、五一一、上段

原文打つたかゝりあるを打つたでこしたは過失か故意かは知らぬが兎も角かがでなければ意味をなさぬ、最早明け六でござりますれば早々御立寄り遊ばしませ家米共が云つてゐるのが山谷の豆腐屋には解せぬこの義である、陸奥守様だから六云ふのは畏れ多いにて殊更に六三いつた云ふ類句に「明けろくを打つてお立ち三浦いひ(安永)」

庖丁で土手の間地を打つて見せ 二九、五一三、上段
間地にかちんの假名を振つてあるは何なる譯か、恐らくはかちんの誤植かと思へど、夫にしても解らぬ、原本を見れば間地さある思ふにけんち即れ檢地の當字であらう、此句は看屋が土手即ち腰なごの片側を庖丁で當つて見て幾つに切るか其廣狭を見積つてゐる場合を云へるものであるから、土手の語に對して殊更に檢地の語を結んだ趣向と思はる。

濡れた袖嫁がまくらの松で干し 二九、五一五、下段

原本にはかまくらにこあるをがまくらに訂せられたので、嫁が枕を取れて何の事か少しも解らぬ嫁鎌倉の二本字に正して貰へば何の事はないのにはこそ手数のか、つた間違である。句義は濡衣を着た嫁が松ヶ岡の尼寺に逃込んで、身の潔白を示したと同時に、縁縁を強請した場合である。

妾かわご奥中で胸悪くする 二九、五六一、上段

原本にはへごにこあるをわごに改訂したのはさう云ふ積りか、是はへご即ち反吐にてお妾の悪出と聞いて奥様附の女中達までが不快に思ふ云ふ義であらう。

川立は川お妾は産んで死に 三十、五二八、上段

原本産で死にこあるを産んで死にこわざくうん字を附加したのでうんで死にこなつたのであるが、是は産で死にこすべきであらう、句義は聊か破産かかりにて評説を憚るのであるが、要するに閨房専門の妾が産で死ぬるは川立が川で死ぬこ同様にて笑止な事であるこの意義であらう。(終)

掃く時に一品づ、を持つて立ち
焼香の煙にその子むせかへり
この母の子が貧相な顔ばかり

同 同 同

□

つきつめた處女の情のものになり
子を醫者につけて夫婦の眼が出逢ひ
兒がひこり欲しいきもちの白い晝
ごた／＼の末上海へひきかへし
竹の皮竹にいさまを告ぐるなり

同 同 同 同 同 同
莢 豆

□

かき船のふすまをあけて一人増は
廻禮の父は歸らず灯がこもり
十二月喧嘩をしないばかりなり
火種から火にする前の置時計
美しい話をきくも十二月
氣が向けば見逃しておくほぎに成り
宿引にきこかで泊る人に見ゆ

同 同 同 同 同 同 同 同
飯 山

□

金ぎんが酔ふさ満洲で持てた事
タクシーへ押上げられるまでに酔ひ
お茶引へ辻占の聲ばかりすみ
見せ付けられてゐる間にお茶子年を取り

同 同 同 同 同
萬 山
よし

女房の知慧が野球に間に合はず

同

女房の上目づかひも久し振り

馬 行

恵まれぬ身に洋行の金があり

同

バクテリア博士の部屋で年を越し

同

大阪の空を逃けんさ五年越し

同

ボブラの樹日本びいきが棲んでゐる

同

バラソルを疊む手付きも詫びるやう

同

大時計を前に女は嘘をつき

同

曲馬からさむけして去ぬ夫婦者

同

左官屋が来てカフェーにして歸り

同

盆栽を散らして書生掃きをはり

同

□

資本家に出ず歳暮の品を選び

二 柳 子

あすも亦雨かと思ふ十二月

同

葉が落ちて舊家の家根が見ゆるなり

同

酔ひつづぶれたのが失業の人なりき

同

人間が見ぬか馳走り来る

同

椀巻は言ひ切らずして立つて行く

同

屑かごを捨てさせ今日の用がなし

同

漁師まだ風がやまぬま轉んで居

同

豆の粉の餅に不作ま書添へる

同



病中贅言 (下)

川柳参尾志を讀みつつ一

蛭子省 二

▲四四頁 續群書類従から御轉記になつた

○五月雨を流石紹巴はてで止める(化)の連句が信長公記の違ふ。

二一八日 西坊にて 連歌興行 發句 性任日向守

ときは今あめか下知る五月哉 光秀

水山まさる庭のまつ山 西坊
花落つる流れの末を關ごぞ 紹巴
然し斯ふださ例の『ナゲキ』三字折込み

にはならぬ。

▲六五頁 高松城の水攻めの句に

○敵をくはく見高松を水でせめ(保)

クボクは敵を侮つての意高松に對し窪くさ掛けてゐるのみならず、古來築城法には高地を選ぶのさ平地を探るのさあつ

て、高松城は後者に屬したから足守川を利用されて水攻めにあつた、クボクには築城法の事も臭はせてある。

▲六八頁 『光秀は六月二日に右大臣を絨し同十三日に小栗柄野に殺された』

あれき、十四日であらう、俗に旬三公方と稱したのは其間十三ケ日あつたからである。

▲七一頁 贅註、桔梗袋こは底に桔梗の花萩を附けたる小袋、女兒なき持つもの。

○桔梗袋に三日さは持たぬ錢 (保)

▲八六頁 『利休が娘に綾こいふ絶世の美人』

みあれき、吟女ではなきや。▲一二五頁 小豆阪の戦に『天文年間

織田信長、今川義元と鎬を削つた』こあるは、信秀の代の事。

○小豆阪あんの如くに突きくづし(政)下五に七本槍の臭ひが少しする。

▲二七頁 紫麥をうたつた俳句川柳其例に乏しい、東海道名所記に『島に高野麥きて一種穂のむらさきなる麥のはなてみければ男 藤川や島の麥に風ふけば

たちて音なきむらさきの波 赤阪御油間は五十三次中最短距離の宿驛で十六丁であつた、

○留女十六丁の損をさせ (寶)

俳句の方へは 乙鳥や御油赤阪の二世帯 許六 夏の月御油より出て赤阪や 芭蕉

『頭痛蓋し昨夜氣』こある。

○赤阪と御油の間で頭痛がし (寶) は頭痛がするに假病で御一泊云ふ段取の場合である。

○名物のうちと御油ですすめてる(明)の甘酒名物説は俳句にも、

しるてもれ御油にさまりの一夜酒があるけれ共、甘酒は三國一なきいつて名物に數へられて居るのだから『名物の

内だ』この勸め方の口吻は『赤坂まで来
さしめこて引たててゆく、こころりかな
この宿も遊女多し』の方である(卯木氏
の御高示に依り、同句の下五は『すすめ
こみ』(五篇)とある由、此方ならば絶
對に飯盛説が確實なるわけである)

▲一七五頁 『慶長十九年は即ち元和元
年である』とあるは誤りで、二十年七月
十三日改元である、家康は『元和三年一
月には正一位を贈位せられ』は、元和三
年三月正一位を贈られ十五日久能山を出
て四月日光着八月廟塔に葬るである。

鐵も妻はのまめ無事な御代(狂句)
弓は綿織地は湯ご治まりて(同)
太平の世は兵法も腹ごなし(同)

▲一七五頁 『元和二年七月に東照權現
の神號を賜より』とあるは如何か、
○神佛同体元和二の御贈官(保)
も歴史とは相異してゐる。
(イ) 元和三年二月二十一日、廟號を賜
はり東照大權現と云ふ、
(ロ) 正保二年十一月、權現號を改め宮
號(神號)を賜ひ東照宮と云ふ
故に家康が元和二年四月十七日に薨去し

たからきて、一切を元和二の御贈官とす
るは川柳家の得手勝手である、本能寺の
討入りを夜の涼み時刻とした位は創作氣
分を見逃しても置くがそうならぬ場合も
ある。

日光を明神とすべきか權現とすべきかは
當時神道者と天海との間に論議があつて
豊國大明神の滅亡が例となり天海の意見
通り佛臭い權現となつた。
▲一七七頁 依に就ては詳細を調べ度い
と思ふ。

○其依十八公のおん手柄(政)
『十八公は云ふ迄もなく松平の松』とあ
る如く古句は殆んど夫れで解釋がつくけ
れ共、一面三河松平氏の族黨は十八家あ
つたもので、十八松平氏と稱せられる。
▲八頁 『名古屋御小荷駄の御用紋八の
字であつた』俗に鳩八と云つて鳩が向ひ
合つて居る、日本紋章學を讀むてゐたら
之れは尾張八郡を支配せる意味から生れ
たさある、序ながら幼少の折から千成瓢
箆に五本骨の扇と云ふ事はよく聽かされ
た。

たからきて、一切を元和二の御贈官とす
るは川柳家の得手勝手である、本能寺の
討入りを夜の涼み時刻とした位は創作氣
分を見逃しても置くがそうならぬ場合も
ある。

○五本骨末廣なるおん印(政)
然るに紋章學一〇二七頁に『戰國時代の
末に徳川家康も七本骨扇を馬驗に用ゐた
り』とある。
▲一三二頁 『多分御油赤坂邊の宿場を
稼ぐ野大波だらうと卑しむ』として
○才三は御油赤坂の太鼓持(政)

これは其の意味の外に全く狂句に作り上
げたもので、芭蕉の作『口すべれ油月夜
の時鳥』同様、油と飯により、口とさか
るさか太鼓持に掛けたのである『才三は
大樹寺なごの百日那』の方が面白い、大
樹寺は一名大壽寺、三河八代中第四代親
忠が建てたのである。

(餘事) 川柳參尾志とは關係のない事
であるが讀書氣付いた事一一、
切味を西瓜にためせ名古屋打 躬之
小姑の琴柱と不和な名古屋打
前者は何句後者は川柳にしし不破と名古屋
屋を掛けた狂句であるが、此の名古屋打
は簪の事ではなからうか、足の股の間
の廣きもので御殿女中に専ら用ゐた、成
る場合には手裏劍代用ともなつたのであ
る。

たからきて、一切を元和二の御贈官とす
るは川柳家の得手勝手である、本能寺の
討入りを夜の涼み時刻とした位は創作氣
分を見逃しても置くがそうならぬ場合も
ある。

名吉屋草履の鼻緒さなしろでもち

狂句許り掲げて恐縮に耐けないが、シロ
こは白く城に出けたので、名古屋草履は
太い鼻緒に眼られ、芝居では御殿様が
はく、自分はお葬式にはいた事もあ
る。

○岡崎の時からお手がよく廻り(化)

此の岡崎女郎衆の唄に就ては多少知つて
置き度いと思ひつゝ果たさない、三田村
氏の鳶魚隨筆の目次に「小唄の岡崎」
とのが關係あろうと察しても其書さへ求
め得ない、「岡崎踊といふ小歌を筑紫
琴に合せてひきけることあり是れ今にあ
る、をかさき女郎衆といふ小歌なり」

(あうじ新つれづれ)とあるから踊の唄
であつたものが、第三味線の手はごきも
のまなつたのであろう、絲竹初集「を
かさき、をかさきちよろしゆ、をかさき
ちよろしゆ、岡崎女郎衆はわいしらうし
ゆ、岡崎しらうしゆはわいしらうしゆ
」或る處に因るに岡崎城主は清城主(清
いは清麻の意)と云ふ讃仰歌であらうと
の事である。

岡崎をくらやみで彈く御上達

古近江で岡崎を彈く御娘様

岡崎を強くは昨日の調子なり
岡崎を變んな調子で彈てるる
一上りなきで岡崎彈いてるる
鼠かと思ふや岡崎彈いてるる
岡崎を橋より長くかかつてる
岡崎を強けばそばから母かたり
三味線のいろは三河の留め女
張弦をしてもよいくよい女郎衆

岡崎を上げて四文が本を買ひ

卯木氏より承はつた所に依るに「岡崎
には寛文頃女郎衆がなほに女郎衆と云
つたのは不審、種彦は岡崎城中のト藤を
襲めたのであらうと云はれ、京傳は説
り云つた丈で發表せぬ由鳶魚氏の説
に候、返還紙料、柳亭筆記等を見れば寛
文頃から行はれた様子に候「金曾木」に
は、三味線の古曲を書きし松の葉には岡
崎女郎衆の歌なしとよきりの歌を三味
線にうつせしならん」と

川柳参尾志は一名戦國史とある如く、英
雄興廢の跡を興味中心に手取よく知る事
が出来、家庭用としての好著である子
弟ある方は一本を備へて話題を探され度
い(十一月十日記)

週刊 懸賞川柳の發表

大坂朝日新聞社發行の「週刊朝日」新年
特別號で募集された川柳「光」の第一席
よ、第二席迄の句をここに轉載して本誌
讀者の參考に資することをした。その他
入賞者五十名の句は週刊朝日について
御覽を願ひます。四六倍版定價參拾錢。

川柳 應募句稿五九七八通

題「光」 麻生路郎選

第一席 神戸市 中 尾 生
かぞふれば光を汚す日の多し

「評作者の靜かな寂しい生活が偲ば
れる。かをりの高い句である。

第二席 丸龜市外 平澤ゆすらん坊
うすぐらい光になれて錢の音

「評金に執着を持ついららしい生活が
巧みに描出されてる。

第三席 大阪市 草 野 木 作
御威光と萬事自分ではきらがひ

「評人間の弱點をつきて機微に觸る。

今回の募集課題「光」は非常に難しかった
さうであるが幸ひにして右に掲げたやう
な佳吟を得られたことは選者として多く誠
に愉快であつた。懸賞募集の句が多く月
並である際にひゞり「週刊朝日」の集句中
にかゝる佳句のあつた事も特筆すべきで
あらう。

一擲集を檢す

一九二七年語

林田馬行

たこへその筆に毒があらうとも、その眞理があれば、必ずや人をして頷かしむる。

柳壇の既往を振り返つて見ても、さうしたものはいつくまでも光りを放つてゐるのである。まことに川柳の爲に嘆き柳壇を愛ふる者あらば、その言や必ず人をして頭を下けしむる何ものかがある筈である。然るに近來自ら柳壇の國士を以て任じ、志士の假面を冠り、柳壇の綱紀肅正を叫んで、箚の倒ひたる程の事をさも重大事の如く云ひ觸らし、以て是を活字

みなし實名に日も足らざる、徒輩の横行甚だしきに至つた事實は、川柳普遍化の産物とは云へまことに嘆かばしき次第である。

是等の徒輩が、一たびおのれの周圍を振返つてその餘りにも果敢なき自己の存在を知るや、日頃の野心は是毒筆の外にあらざして何ぞや。てな淺はかなる考へから盛んに毒舌を吐くに至りたるものを見て間違ひはないのである。

事實その筆にする處、何等川柳の進展に資するものにあらずして常に第二義第三義的な柳壇小時事問題をさらへて吠ひついてゐるのに徴しても彼等が何等節固たる信念なく川柳を玩弄して只々實名に汲々たる柳壇の浮浪人に過ぎない事が解るであらう。

過去一年有半、川柳の精進に他を顧みなかつた、私等一派は毎月々々是等の不遜な埋草の毒舌に遇つても一切おかまひ

なしにすん／＼適て來た。それは常に私等がモットーとする處の川柳社會宣傳てふ使命の本旨に悖る事であり、且は又、禮を失した是等の放言に對して一應戦せなければならぬやうな不用品な紙面を持たなかつたからでもある。

然し乍ら新進の出現急なる近來の柳壇に在つて、徒らに是等を括し、置く事は柳壇の將來より見て聊か氣がかりならざるを得ないので、新年號の増頁を見込んで、彼等の迷妄を醒ますべく醒めるべく貴重な紙面を拜借した次第である。

さこそ賣名的毒舌の雄なる者に番傘誌の乾坤氏ある事は知る人ぞ知れる筈である。今その乾坤氏の筆になる「一擲集」てふ述文を引張り出して一々檢討する事にしやう。

大體この「一擲集」は昨十五年中斷片的に「番傘」誌へ書きなぐつたもので、尙この他に氏の筆になる埋草的述文が可成りある。今それ等を手當り次第に引ずり出して隙だらけの氏の言説に活を入れて見やう。

さて氏が「一擲集」を「番傘」に載せはじめたのは大正十五年の新年號からであつて、當時、大阪柳界に顔を出すやうになつて未だ間もなし氏の事さて、その筆にする所も常套的に眞面目さうに川柳を歎いて見たりして、猫を冠つてはゐたが、それでも可成り頭の悪さを表明してゐたのである。

例へば

川柳家には随分に理屈を云ふ人がある。

(中略) 悪い事は云はない。句を作れた。一句でも多く後世に残せだ。おつこさう澤山残らたら「一句を残せ」に抵觸する譯で叱られるかも知れない。

なごこ頗る頼りない筆で、嘗て路郎主幹の書かれた巻頭言「一句を残せ」に嫌味を並べて見たり、或は選をしたがるものは中古川柳家に多いとか、選者の多いのを大袈裟に歎いてみたり。一體、氏は何を云はんとしてゐるか、譯の解らぬ理屈を云ふ川柳家こそ氏自身ではないか。

それに氏には感情的に妄斷する癖があつて、凡て支離滅裂の文章に終つてゐる事はまことにお氣の毒ならざるを得ない

尙「番傘」三月號所載「一擲集」二に於て

(略) 近時二三柳誌にこの先生なる尊稱? を散見する事が多くなつて來た。川柳に先生あり又嬉しからずや(中略) 先生の流行世は淺季だま云ふ感じがせぬでもない。なごこ聊か先生なる活字に對して擲擄してゐるが、こゝらが一體頭の悪い點で、氏が常に川柳の第一義的論據に依らず、斯かる柳壇時事問題に、こせくする事に終始してゐるのが解るのである。成程氏の云ふが如く、氏の隸屬せらるゝ「番傘」には先生と申すべき程の御人がないのであらう。

然し乍らそれを以て直ちに柳壇を律する事は餘りにも御勝手が違ひすぎるに云ふものである。

こゝらあたりが氏の頭の悪い點で、年ばかり喰つて一向頭の冴わぬ所以である。

尙同誌十一月號に於て

個人選に情實や妥協のあることを見附するが排すべき事である。(中略) 例會席上往々この情實妥協を見せつけられる事があつて(中略) 聞く所に依るま彼の二百圓懸

賞には、随分如何はしき噂もある。そんなじよそこらにもこの懸賞妥協常習選者が銀座まします云ふ事は、一面政略のためには云ひ乍ら哀むべき人である。(後略)

なごこ如何にも他事らしく書きつらねてゐるが、こんな活字は凡て、廻れ右おいに、で御自分の懐へ後戻りさすがい。一體氏は何を根據さしてかゝる初心者を惑はすが如き言辭を吐くか。氏にして確たる證據があれば、我等またかゝる選者を追拂ふに躊躇する者ではない。然し乍ら氏の前後の言説よりして、また例の實名辭を出して奇利を博さんとする氏の淺はかな肚裏が見え透いて、氏のために聊か惜しまざるを得ないのである。尙同誌十二月號に於て

「川柳雜譚」柳談會で今更破調の句が問題になつたらしい。「蛙を踏むまいと神經衰弱」この句が革新川柳家の總てを物語つてゐるやうにも思へる。社會主義者を肺病が多いやうに、革新を標榜する川柳家にはこの種の神經衰弱が多いと見ゆる。

なごこ暗に我等一派をも擲擄してゐるが、あたらない。氏にして眞に川柳に生きる者なれば決してかゝる禮を失した

る不遜な言辭がない筈である。
革新派を神經衰弱と罵しる氏こそ、鈍感な、常套的な、平凡な、均一川柳の製産者ではなかつたか。
尙同誌同月號に於て。

モダンガール云々言葉が非常な勢ひで流行してゐる。(中略)これを川柳家に例へたならば、斷髮は革新川柳家で耳障しは准革新とでも云へるだらう。何ぞモダン川柳家の多いことか。
なごご又々失敬な毒舌を吐いて愈々氏の人格がレベル以下である事を立證せしめた。

大體氏には五六行の言辭を以て人に當らうとする不用意さがある。是は氏のみならず『番傘』の先達水府氏の悪い辭でもある。試みに大正十五年度の『番傘』を披いて見よ。そこには乾坤氏にもおこらぬ、不遜な、皮肉な嫌味な一顧の價値もない水府氏の筆が毎號く、到る所に發見せられるであらう。吾人が今日一向氏に心服し得ないのは氏のかゝる人物のちつほけな點にお愛想が盡きてゐるからである。かつては吾呂八、小康に云はねば

ならない立場にあつた當時の氏は、一體何をしてゐたか。今日氏が三流川柳家にも劣つた言辭を口にするに至つてはまことに氏の爲に惜しまざるを得ない。今にして氏がかゝる臍甲斐ない辭を矯正するにあらざるやがては氏もまた救はれざる部類に入るであらう事を氏の爲に警告しておく。

筆は漸く岐路に這入つたが、氏にもまた一度は言はねばならぬ多くを持つてゐる以上、この際にもぶちまけておく次第である。

水府氏のいゝ所を真似ず悪い所ばかりを見習つたのがこの乾坤氏なのである。一部の番傘會員の言によれば、乾坤氏が『番傘』に於いて或地位を獲得せんために汲々たるものがある云ふ。成程氏の筆にする言説より察すれば氏にしてありさうな事である。

乾坤氏が今や内外共に反感の焦點となりつゝある事實はやむを得ぬ事乍ら氏の爲に聊かお氣の毒ならざるを得ないので

ある。

かゝる中にあつて尙水府氏が彼を重用視する理由は成程僕等には解る。然し乍らそんな川柳政策の上から柳壇の毒せらるゝのを黙過してゐるわけには行かないのである。

水府氏よ。もういゝ加減に鉛の金球勳章の一つ位呉れてやつて乾坤氏を休職にさすがよからうぞ。

柳壇の淨化を心から願つてゐる吾人はこの一文と共にまたくもこの沈黙に還るであらう。實の處吾人はさういゝ毎月貴重な紙面を割いて下らぬお相手をしてゐられない状態にあるのである。今後共彼等は彼等で毎號々々野犬を狩果めては吠立てる事であらう。それらに對しては何れ大正十七年の初頭に一夕年分一束に檢討するであらう事を書き添へておく。
尙、直接または書信を以て本稿執筆の動機を與へられた諸兄に感謝して擱筆する。



柳川 父と子

麻生路郎

僕の子福者であること、その名が今の世から見て、天古である事は、新聞雜誌でかなり宣傳してくれたために、今では僕自身の名よりも、ロンドン(長男)やアート(次男)の父として知られてゐる。その父の句に、子ぎもに對する愛から生れた句の多いのも、敢て不思議ではあるまい。

奈那(四女)がうまれた頃は、經濟界に一大打撃の來た大正九年の十一月で私の生活も亦尤も險惡を呈し子ぎもが多數にあるので、女中には逃げられるし、蔑乃の母體の恢復も思ふやうにいかないことと思はせられたので

天井のひくさも知らず子は生れ
さいふ句が、未だに、その當時を回想せしめてゐる。

その後阪神沿線に落ちついた私の生活は心だけでも少しくゆきりを生じ、子ぎもの多いことも以前ほきには苦しめられなくなつて、遂に子ぎもは夫婦の間の藝術的作品なりまで思ふやうになつたのである。アートの名の出た所以である。

その後リリ(五女)の名の音學的なものもこれによつて知られるであらう。

ロンドンが生れ奈那が生れるころまでは非常に暗い、しかも争鬭的な句ばかり吐いてゐた私は、近來非常に地味な句さなり、一方では子ぎもを詠んだ句が多くな

つて來た。

裏へこいソライちぢくをこつてやろ
書ふる泳ぐ氣にさへなる父よ
子煩惱がつたんくしてくらし
子を泳がせて沖の景色は目に入らず
子の子も子の子も息災でお元日
すべりんこ親は涼しいこと待ち
俺に似よ俺に似るなま子と思ひ

なき數へれば數かぎりなくある。私は斯くして老いてゆくのであらう。私の句に子ぎもの句の多いこと、そして子に對する愛着が深い事なごを、酒を呑み遊びもやり議論もする私から發見したのは實に萬よしの妻君だつた。流石に客商賣のヒロインだけあるは思ふが、彼の女も又子煩惱に外ならないのだ。子ぎも達は實にあげすけで自由で、雀のやうに御機嫌がいから私の句の多くに影響を及ぼさないではおかないのだ。私も當分はいお父さんだ。近く出來た句に
箸紙を父おちついて書いてやる
さいふのがある。(暮の十九日)

第八回 柳壇會記

松崎 塚 郎

柳壇會に出席すべく十一月十四日午後六時、心家を出た。心よい日和ではあるが、路の片影を行くさうつすら寒さを感じて晩秋のあるものさびしさを思はせる。みかんの走りが並べられてゐる果物屋の店先を通つた私は、蜜柑が好きであつた母親を憶ひ出した。

阪神電車に揺られ乍ら「今日の會はどんな人達が出席されるだらうか」なき、いろいろな柳友に會ふことを楽しみに思ふて鳴尾に下車した。遅日莊へ行くにだ誰も來てゐなかつた。早速階上へ失禮するに、莊主・葎乃さんが子達を相手に、温い陽射しの中に、むつまじさうに談笑されてゐるころだつた。いつも乍らの家庭愛が先づ第一に印象つけられて

明るい部屋を一層まばゆう思はせた。それに引換へて、まだかういふ團樂の分子を有たぬ私をかへり見て、またじき母を憶ふた。

暫らくして二柳子氏が見わたので、主幹路郎氏三人で、十二月號編輯の整理をして出席者を待つことにした。

路郎、葎乃、紋太、清公子、嶺月、英豆、刀三、馬行、二柳子、松郎

以上の出席者が相前後して揃ふたときは編輯整理も終つて居た。あかるい灯の下で二五の笑顔が雑談を交し乍ら柳壇會は開かれて行つた。

雑談がいつしか漫談となり「親類」に就ての變つた話から、更に「資本家觀」をいつたやうな面白い話に移るなき、話題の盡くるのを知らなかつた。而も話術の巧な諸氏は、各々その體驗よりして縦横に話題の内ミ外より歩を進める妙は、柳壇會の一の特色であらう。その資本家觀に至つては、從來のやうな、單なる使

用人根性より觀たるその如きものでなく、公平な立場より奥深く觀たる善意の資本家觀であつたにのみふたでも特筆しておきたい。

次に相元 紋太氏より「菓子製造販賣」に就ての經營上や、顧客の種々相等のお話しに一同齒を浮かす。お話中に、路郎、刀三氏等の大酒家が「かほかさうの、饅頭がさうの」ミ質問を連發してゐたのが人目をひいた。

紋太氏のお話がすんでから、雑吟五句を作句して、第五回のさきのやうに清記紙上互選をやる事になつた。清記役は例の馬行氏で、互選の結果次の句を得た。
馬行(十一點)路郎(八點)刀三(八點)紋太(六點)英豆(五點)松郎(五點)葎乃(三點)嶺月(三點)以下略

五 點

女房を無視して茶漬いそがし、馬行ひさかきの女房ミなつて店を閉る。刀三

三 點

月末に、高だけを聞ひて出る路郎
商賣の嘘が丁種の嘘になり紋太

二 點

息をかける壁は惱みを打ちかへ路郎
圓タクはあくせくして走こ居同
旅路ふさしんからほれていそぎ莢豆
兄弟仲をようして逢へばさびし同
背丸く丸く口説きに掛つて居馬行
アンテナの見ぬぬ郎が家主なり同
して紐の重みになれて戻つて来松郎
よく話す主人の横に炭をつぎ同
湯呑茶碗も友達の中紋太
わが餌へ他の鶏を寄せつけず嶺月
ひき潮のやうに山から晴る来乃
句の發表後、例によつて高點句より順
次合評がつづけられたが、今回は總體に
常套的な句が多く、佳句としては「ひさ
かぎの女房さなつて……刀三」のおさな
しい句の外に「息をかける壁は……路郎
『旅路ふさしんからほれて……莢豆』『
湯呑茶碗も……紋太』等が當日の收穫で

あらう。従つて特筆すべき批評は少かつた。

かくて十二時過ぎ第八回柳壇會は終つて一同は、路郎氏に送られて鳴尾停留場
で東西に袂を別つた。

私は歸りの電車の中でふさぎ紋太氏の事を憶ふた。柳壇會にはたいてい顔を見せられる同氏の熱心さにつくく感心された。學ぶべきことだとも思つた。それ

につけて思ひ出されるのは前刻の同氏のお話の終りに「私はもつと商賣に熱をかけたら盛天になることは思つてゐるが、

つい好きな川柳の爲知らず／＼商賣がお留守になつて行きます。好い事が悪い事

かは知らぬが」云々される位で、如何に川柳の爲に犠牲を拂つておられるかは

この一言にて足ると思ふ。尙斯ふした熱心な先輩を持つた神戸柳界の幸福がしの

ばれてならなかつた。(十五、十一、十五)

川柳献句祭

舊公千二十五年祭を記念するため
川柳献句祭を行ふ。

時日 一月十六日午後一時より

會場 大阪市北區天満
(市電南森町下車)

天満宮

兼題 「梅」三句

講演 「川柳家の眼」 麻生路郎選

會費 金五拾錢(當日持參の事)

記念影撮 關西川柳家を網維

を逸しないやう、萬障を兼ね合は

せて御出席を願ひます。眞は希

望者におわからいたします。置

景品 景品は多數に準備して置

景品 きます。

初心者は勿論作句に經驗の無い方

も御出席を歓迎いたします。平素か

ら句會に行きたいとは思ひながらつ

ひ勝手が分らないので出るのを躊躇

してゐられる方は斯うした機會を逸

川柳家の字に就いて

正岡 蓉

——水府氏の雜誌に、せんだつて、ほくのこころを、『もみ川柳家』正岡蓉』ミでてゐました。——川柳をつくつてゐたものが川柳家とすべと呼べるなら、いかさま、小生なごももみ川柳家にちがひない。——16の5月から、久良岐先生の門を叩いて、20才、即ち大正12年4月、ほくが小説屋さんの看板をあけるまでヤナギダルに耽り、センリウをつくり、さうした味はひに感溺してゐました。大正11年歲晚に除夜のつきひを久良岐社で徹宵先生と雀郎氏と小生、三人きりで行つて百吟會なき催したこころもあります——而し、マヅクもあつたし、詠む句もかて、

少かつたし、川柳家正岡蓉氏はつひにそのころ世間からはみこめられませんが、した、みこめられぬうち、ほくの心緒が次第にセンリウにアディユを告げだしました、その理由はあそこでかきますが。で『番傘』にでた『もみ川柳家』に少からずほくを苦笑させ、恐縮させ、いさゝかはテレたやうな氣にもさせたこころなのです。——それについて、つらくあたしは考へずにはゐられなくなつたのですがあなた方、センリウ家たちは川柳家といふコトバを餘り誰にでもつけすぎはしないでせうか？——ほくの場合は問題がちよつと別になるが、對外的にみこめられ

てゐぬ猫も杓子も川柳家であるのはさういふものでせう、川柳をつくつてゐる人ではたしかにあるだらうが、『家』といふ一字がゆるせませうか？ほくら小説屋さんの仲間には『文學青年』といふコトバが習作期の人々にたいしては設けられてあります、最もこのコトバには大へんにいまでは輕蔑がこめられてゐるが、ゲンシユクなイミでまだ對世間的でないあひだの人には、やはり、何といつても『文學青年』といふコトバを、侮蔑的ではなしに、つけて浮ぶこころが差支ないと思ふ——だのに、さうして川柳の世界のみは熊さんも八さんもセンリウ家なのでせう

「いや、さういふ前に熊さん、八さんたちが他から『川柳家』を做ばれたこと。」

「いや、あたしたちはまだ家いふ身分ではありません」ミ自らクソソクしないのでせう。「家」いふコトバに恥ぢないのでせう。「家」なんて何コトバは、冗談ぢやない、小さんの「うごんや」ではないが『さて、小父さん、このたびはてねコトバと同じで、全く』並大抵の學問でいへるコトバぢやない』と思ふが。あたしはいつも考へるミフシギでならないのです。

いや、それはいけない、だつて、センリウは民衆ゲンジュツだから、もしたら、仰言る方がでてるかも知れないが、では民衆ゲイジュツなら、八さんも熊さんも「家」をなつてい、だらうか？ゆるせるだらうか？…小説の方でもちがごころ、再び、燃焼じだしたブロンタリヤ文學は、多く事實、きふふまで職工だつた人たちの手でも創られてゐます、そして現在職工である人たちにも、一ばん、あの文學がやはり脚を打つてみられて、多く、讀ま

れた、なかには自ら創つてゐる人たちさへ有ます。いかにさ、民衆ゲイジュツ」たることにちがひありません。而しては、まだ、對世間的に名のない、一職工であるあひだも彼らは單に自ら小説をかいてゐるさいふ丈けで、民衆ゲイジュツ家「なり」小説家「とよばれてゐるでせうか？もう、一職工ではなく、その製作の世にみせめられたしたAとBさかいふ人と同じやうに。

ハナシカや役者や、その他、文字で訴へる以外の藝術家は成程、どんな前座でも、馬の足でも、桂にながし、三遊亭にながしさいへば、ハアア嘶家かいな、市川にながしさいへば役者らしいなとわかるけれど、同時に彼らの職業はそれはゴホビエラーでもあるし、又どんなサードクラスの彼らでも、第一それによつて生活資を得てゐるしいや、その前にこの二つの問題を別にして、而し當然彼ら、目や耳に訴へる側のゲイジュツ家と、文字を以て世に問ふゲイジュツ家とは、この點根本から、火よりも明らかに、軌を一にしてゐないものではありますまいか？

『川柳雜誌』がセンリウの世界に於ける

最も、新しい魂のダンスホールである以上、一つ、來年度は、ほくら、第三者にもうなつかれる程度のぜい厳然たる、この間の差別をつけて頂きたいさねがふことは、センリウといふ藝術の本體からいつても、さう無意義ではなからうか？存じますがいかゞでせうか？さうしたら、所謂習作期の人たちも、もつと、旦那藝でなく、このゲイジュツにたいして、まじめに考へ、『選ばれたる人』のみが、そこに精進してゆきはしないでせうか？——もちろん、門外漢の暴論ですが。

尙、小生が、センリウとはなれて了つた心情を申上るさ、ちよつと、フクザツな、時世相的にオモシロイ問題が生れるのです、歳末で、目下、太だ多忙です、ぼくのこゝだからこの誌上でいふが、「番傘」でいふが、それもフツターの雜誌でいふが、殆んど、未定ですが、他日、ぜひ、それをみていたゞたく存じます。

募

集

句

月 末

蛭子省 二 選

月末に利子丈けでもご申わけ 支柳
 頼母子を頼り月末待つてゐる 鮎美
 月末はやつぱり母を拜むなり 三志郎
 月末になるま備の愚痴が出る 柳秀
 月末にあの夜の事がやつこ知れ 花蝶
 月末をくはへ煙管の會計課 櫻ン坊
 月末を無事に過して猪口が出る 耕水
 月末に兄がひよつこりやつ来る 天魂
 月末に丁稚 仕拂ふ洗ひ賃 千鳥
 月末を芝居で更けて獨り者 ひでを
 月末に社内の空氣重くなり 魔婆坊
 月末さいふに葬會の通知狀 殘紅
 月末の炬燵始末の咄なり 突支坊
 子持客月末に来て高笑ひ 水笛
 月末ご知つて風呂にもゆかぬな 素峰
 月末になつて女房を里にやり 一葉
 月末に残つたものは財布なり 芳雪
 月末の譯煙草なごを出し 侶之助
 月末の喧嘩煙草錢もなし 一文字
 月末がきて伯付さんの噂なり よし久

月末の丁稚たつてる繪看板 鎌月
 煙草一箱買つて置く月の末 靜雲
 腹が立ちますま月末の高利貸 山雨樓
 翌月の末拂にして誂へる 眺太郎
 月末のさうやら越せる膳の猪口 大夢子
 月末は女將が電話かけてゐる 志郎
 月末の言譯け稼ぐ事にきめ 白鷗
 月末にあてゝた金を子に送り 濁水
 月末に近く注文届けられ 紫光
 月末の湯錢もなくて口巧者 千代二
 月末は見込があるま株を買ひ 山月
 請求書出されて夫婦膝をうち 幸教
 月末に何故か親方酔うてる 一路
 月末に五日拂の紙をはり 良道
 月末に隣は琴をあはせてる 倒壘
 月末にきた友達に會へぬなり 案山子
 月給が今日はもらへる靴をはき 天花
 月末の窓口仲居笑つてる 拔天
 陳列の柄が變つた月の末 同路
 裏書をして月末の物淋し 聞路

川柳家の戸籍調べ

□ 係 馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所
 (五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)
 好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川
 柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)鎌
 ひなもの(一三)川柳に手を染めたる年

(115)

島田雅樂王

(一)島田毅(二)雅樂王(三)舊く俳號を
 柿洲、あゆ子と稱したりしも今は殆んご
 用ひず(四)東京市外碑文谷三三一(五)明
 治二十二年十月一日越中富山に生る(六)
 官吏(七)時代の洗禮を享けたる清新の句
 ひ高き同志の句は皆好き(八)クラシカル
 タイプの女。ま云ふ意味はあたら黒髪の
 艶やかさを彼れ自らの故に失はず、常に
 櫛目立ちたる爽涼さを保ちきり、いんしや
 んごある程の女、必ずしも柄の大小、長
 短を問はず、立てば立ち座れば座るそれ
 なりに、美しくもなごやかに流るる線の
 硬化せず女らしさの整齊を自然に湛はし
 得る女、九一句を生むごの尊さを體驗
 する私は、わが生める凡ての句を讚仰
 する(一〇)尺八、義太夫、長唄、箏曲、太

牛肉の箸が揃うてよく煮ゆる 聞路
 牛肉の世話に忙しい母の箸 同
 牛肉の用意話の中へ出来 山月
 強ひられる座敷に煮ゆる肉の音 同
 牛肉屋ベタリ置いて切りは 英兒
 牛鍋酢に主客共に酔ひ 同
 牛肉へ子供走つて歸つて來 同
 牛肉へ亭主の胡座幅を取り 同
 五分間スピーチ肉がにわつまり 凡平
 牛肉へ炭はねる事はねる事 同
 牛肉でもう飲めませぬ顔になり 同

寢顔

病みつゝ寢顔やつぱり親で 聞路
 寢てゐるにさきん笑ふおま 幸教
 起きりや父に寢顔は母に以て 緋紗子
 根性わる寢顔を見てもようわ 良道
 すやゝ眠るへ妻のしのばれ 倒壘
 人の氣も知らぬ寢顔へ腹を立て 雪村
 可愛さの寢顔を中に今日も更け 支柳
 晩酌は膝で寢た子をなで見る 櫻ん坊
 寢顔が嫁のほんさうの顔 天花
 附添も安心をした寢顔なり 案山子
 ある時は祖の寢顔が怖く見 憲翠
 こつほり寢顔も見兒の蒲團 紫光

殺される日の牛の眼に涙あり 萬よし
 二階借今日すき焼の火をおこし 同
 スポーツの宮牛肉の罐を切り 同
 (佳)一家團樂牛肉の晩 眼聲
 (佳)戲談はすき焼の手の指輪 萬よし
 (佳)就職のさく云ふ肉を喰ひ 松雨
 (佳)姐さんと呼ん牛肉美味い 聞路
 (佳)いゝ暑氣と肉鍋へ割て入り 濁水
 (人)牛めしのうま厚司の有難く 三志郎
 (地)欠勤をして牛肉を買ひに 聞路
 (天)牛肉の匂ひ丁稚は店にゐる のほろ

塚崎松郎選

子守唄やつ寢顔に蚊張を被せ 濁水
 寢るにも笑ふこさあり處女らし 萬よし
 明聲の寢顔が罪もなく並び 志郎
 母親にすつくり寢顔瘦せてゐる 凡平
 十八になつた娘のこの寢顔 よし久
 太陽へ虎の寢顔のすなほなり 一文字
 貧弱な寢顔へ筆のやりきころ 芳雪
 此寢顔短氣な人と思はれず 一葉
 あの時の寢顔に筆が立たぬなり 素葉
 寢顔向けられてこそ泥ひやつと 良雄
 腕白の寢顔疊へすりつけて 残紅
 世帯苦のまさゝ見ゆる寢顔也 突支坊
 結構な寢顔の並ぶお説教 廣婆坊

(五)明治三十八年四月二十六日生(六)臨
 案講工(七)徹水車苔のむすまで使はれる
 紋太(八)尼僧があつた。墨染の法衣の
 奥にかすかなる女性としての、やはらか
 味を僕は感じた。普通の女性から受ける
 感情とは異つた……(九)残念な事ありま
 せん(一〇)愉快な事なら何でも(一一)殘
 念な事無し(一二)こけた御飯(一三)大正
 十二年頃より。

(一四) 三好革郎

(一)三好正明(二)革郎(三)なし(四)大阪
 市東區淡路町三丁目船場ビル内公憤社
 (五)明治廿七年七月十日生(六)雜誌記者
 (七)路郎先生の「豚の子に續く豚の子ば
 かりなり」(八)僕の女房のやうなタイプ
 の女(九)まだありません(一〇)酒、煙草
 賭博、淫賣買ひ、旅行(一一)一人あり
 (一二)嘘を吐く奴も見得坊を怠げ者(一
 三)大正七年三月頃？

(一五) 河添一文字

(一)河添総(二)一文字(三)なし(四)大阪
 市此花區大野町二丁目九〇番地(五)明治
 三十六年二月十一日生(六)電工(七)「館
 屋の荷大將以下に取巻かれ」松郎「我を
 折れ」母からの文さつが出る「露草(八)
 毒婦型、九是から吐きます(一〇)民論、
 小唄、都々逸を轉々して定まらぬ浮氣男

寢顔には似せぬ優しい女なり
 別々の寢顔へ朝の陽があたり
 散々に困らせて寢たやうでない
 家中に足音させぬ 兒の寢顔
 病人の寢顔を見詰めふと怖れ
 膝の子はいつか無心に寢てしまひ
 寢顔つくづく毒婦は、笑み
 妾のびく、且 那來ぬ夜
 口許に給ひつゝけたまゝ寢てる
 寢顔には露ほごもない安らかさ
 母親の寢顔へ可愛指が這ひ
 手内職さきく寢顔覗かれる
 寢顔もう耻かしがつたあごも
 寢顔未だ頭を去らず 一七日
 何か喰ふ音に寢顔の咳拂ひ
 ハンモック寢顔陽がさし影が
 さん底に神々しくも子の寢顔
 こちらに似たんでせ。寢顔を見
 添乳からぬけて御無沙汰し居
 子の嚙んだ乳首に寢顔聲を上げ
 丸く寢る犬の寢顔は腹にあり
 寢顔つくづく鼻の低い此子よ
 寢顔にも似ず恐ろしい高いびき
 腹立ちを眠つた顔と見えぬなり

無心 眠聲 花蝶 一徹 三志郎 柳造 一路 静雲 同 千代二 耕水 其象 萬よし 鎌月 侶之助 残紅 突矢坊 千鳥 光路 三志郎 大夢子 眺太郎 山雨樓

居眠りの顔長うなりく、
 交番へ小さいな尉拾はれる
 寢顔見い見い終點へ着き
 のんびり寢顔ちらばる温泉場
 見舞客樂な寢顔を見て歸り
 地蔵のやうな顔で寢てるる
 眠つたら睫の長い顔になり
 話の横に寢顔が 一つ
 その寢顔親の心を引立たせ

寢顔からぬけて續きの針を持ち
 看病の寢顔病人見詰めて居
 蚊帳高う姉の寢顔のさびしすぎ
 寢顔ふご在りし昔にさかのほり
 子の寢顔ばかり見てゐる父で
 妾のひざに寢顔をさらし
 何氣なく妻の寢顔のねたましく
 寢顔もう涙乾いてゆくばかり
 (人)母の手の温馴寝入るなり
 (地)子の寢顔も叱る叱るまい
 (地)火熨斗消す寢顔の戀しさよ
 (天)年寄。皺深々寝入るなり
 (軸)寢たあごは時計に任し
 屋賃六圓寢顔並べ

同 拔天 同 山月 同 水笛 同 聞路 同 聞路 同 柳秀 一路 白鷗 鮎美 彩秋 雪村 山雨樓 鐵人 天花 大夢子 山雨樓 松郎 同

佳

(21) 田中 彩秋

です、然る故 凡て堂に入らざる事 確實
 (一一)なし(一二)是と云つて嫌ひなもの
 なし、お目出度い人間です(一三)二十一
 才にして不具となり遊びに行つても少し
 も面白くなく心がひがんで行くばかりで
 した、その時拍子木川柳社のむつみ氏に
 依つて川柳を興へられそのまゝ獨眼坊と
 名づけましたが、餘り極端この聲をき、
 一文字を改めました。

(一)田中彌(二)彩秋(三)彌の八、稔骨
 根子樓(四)大阪市北區與力町一丁目一八
 番地(五)明治三十四年 四月二十二日生
 (六)吳服商(七)「こほろぎよ私も蚊帳で
 起きてゐる、腹乃」等其他多くあり、實
 感至心に溢る句、だから雜詠に其の多く
 を認めます(八)？(九)今後を期待します
 (一〇)短歌、俳句、都々逸、登山歌勝、
 論曲、讀書(一一)無(一二)まじめを標語
 としてゐるので是に反する人、酒、人參
 玉菜 煮物(一三)大正十一年頃だと思ひ
 ます、水府さんに選を受けたのが始めて
 す、眞に柳界を知つたのは十四年秋です
 それ迄は片手間の川柳でした。

縁談

◇ 二柳子選

縁談をこころわかれた叔父が来る 芳雪
 大層な聲で破談になる 長屋 雪村
 叔父の縁談聞いて戻るなり 緋紗子
 むつかしい縁談でした 仲人 良道
 それほごに娘も言へは出来る 案山子
 縁談を持ちかけられる年になり 眺太郎
 五年振りで歸り縁談決めに來る 素峯
 縁談を娘不思議に嫌ふり 彩秋
 縁談へ娘はテニスから戻り 大夢子
 縁談を切り出してから親しめず 三志郎
 縁談をまづ女房が聞いて來る 光路
 母親に聞いてほしいと娘なり 花蝶
 見合だぞ知らず中座で笑つて來 支柳
 縁談が新聞にのるいゝ身分 千鳥
 縁遠い事を老父は淋しがり 無心
 縁談をきめて両親急にふけ 鷹婆坊
 縁談がきまるさ髪を結ふても見 突支坊
 口髭を剃つて縁談聞き直し 残紅
 縁談の事で次男は歸國する 鐵人
 縁談にめぐまれぬ儘年をさり 水笛
 父は腕母は氣を云ふ 翠選 良雄

橋本二柳子
 庄萬よし 共選

縁談がきまる間際に出る 一葉
 縁談が近く仕事を手につがす 侶之助
 縁談がさてもむつかし舊家なり 一文字
 縁談の話まづ茶を呑んでから よし久
 お茶の汲み様を仲人見て 歸り 鎌月
 晴着縫ふお針子一人減る噂 志郎
 縁談さあつて娘は打明ける 憲翠
 母親をまづ説きふせて仲人去に 天花
 縁談へ分家の叔父の知恵も借り 櫻坊
 嫁ぎたいか娘に母訊いてゐる 倒堰
 良縁があり故國の土を踏み 拔天
 今日もまた仲人が来るよい天氣 耕水
 先様の御都合もある縁談 聞路
 縁談へ娘は針の手を休め ひでさ
 共々に泣き縁談をうけいれる 千代二
 縁談の中へ聞ゆる琴の音 山月
 針仕事その縁談を背で聞き 鮎美
 縁談のほめもくさしもせず 同
 その様な話近頃高島田 眠聲
 縁談へ娘下を向き下を向き 同
 縁談は近く娘は臺所のほる 同
 縁談が決り忙しい母さなり 同

川柳書架 (二二)

木卯柳句抄

(三面子編)

▼大正十五年十月三十一日發行。非賣品
 發行所は東京市立日比谷圖書館。岡出三
 面子編。

▼柳樽中より木卯(柳亭植彦)の句のみを
 拾ひ蒐めたもの、この書の如きは編者に
 して、はじめてよくなし得るもので、川
 柳研究家のため資するところが多い。

川柳や狂句に見えた外來語

(藤姓外骨編纂)

▼その自序を抜く、
 言語の研究は實に興味ある學問の一つで
 ある

予は其興味に唆られて、多年俗語の研
 究に従事して居るが、言語學に於て云ふ
 が如く、言語は其國の狀態を代表するも
 の、一言一語にも由來あり變遷ありて、
 其國狀の如何を察し其民性の如何を察し
 得られる。

今は英語の流行で、童叟までが英語をま

縁談に母親一人あせつて居 柳造
 たま／＼の伯父縁談を持来る 同
 縁談をさけて南で酔うて居る 凡平
 縁談へ肺炎の事言はぬなり 同
 縁談にただ振袖をいぢつてる 其象
 縁談に娘近頃落ちつかず 同
 縁談を知つて娘は座を外し 紫光
 縁談を他所にピアノが上達し 同
 縁談の娘近頃肩が凝り 一路
 聞き合せ婚はなか／＼親孝行 同
 縁談にぶつきら棒の息子にて 山雨樓
 縁談に来て碁をうつて歸るなり 同
 國からの縁を断つ女學生 柳秀
 さんな娘が氣にいる腹が立ち 同
 縁談を考へ入つて猫を撫で 濁水
 うなづいた縁談針が進むなり 同
 (軸)縁談の手紙に娘戻される 二柳子

◇ 萬よし選

縁談に来て碁を打つて歸るなり 山雨樓
 仲人の無口縁談まごめて來 ひさご
 共々に泣き縁談を受け入れる 千代二
 縁談に指折るこごがしきりなり 一路
 先様の御都合もある縁談 聞路
 縁談を聞き／＼娘何か持ち 耕水

終局を意外な縁にあきらめる 緋紗子
 良縁があつて故國の土を踏み 拔天
 仲人の口では二ツ若い管 櫻ノ坊
 誰が来て呉れませんか取合は 案山子
 相性のこゝで母親首を振り 天花
 縁談を他所にピアノが上達し 紫光
 貧乏の中に姉娘の縁談 憲翠
 極めてゐるほかに縁談持ち上り 濁水
 暗着縫ふお針子一人減る噂 志郎
 たま／＼の叔父縁談を持つて來る 柳造
 結構なお庭仲人褒めちぎり 鎌月
 縁談に戀は暗中飛躍なり 一文字
 縁談と別なバザーの幹事にて のぼる
 縁談を秘密々々吹聴し 一葉
 出戻りの姉にすまない玉の輿 良雄
 籤入りのうちに縁談持ち上り 鐵人
 縁談を決めて兩親急に老け 鷹婆坊
 縁談を避けて女の強く生き 千鳥
 窓にもたれて悲しい縁談 眠聲
 飛行郵便に縁談を托し 花蝶
 縁談を切り出してから親しめず 三志郎
 縁談を嫌つて娘處女でなし 彩秋
 縁談へ籤から棒に鳴るラヂオ 大夢子
 縁談は褒めもくさしもせず極 鮎美

ねんで居るが、江戸時代にはホルトガル語、スペイン語等が當時のハイカラー語であつた。其ハイカラー語を取入れた作句集の本書。これを大きく云へば、日本外史の補助録である。

然し其作句が甚だしい。少い理由は、徳川幕府が吉利支丹を畏れて國禁とし、阿蘭陀通商船の外は入國を許さず、外國語の研究をも許さなかつた時代で、僅に残る足利末期以來の通語ばかり、其通語の過半は後に日本語化したのであつた故である。

そして其通語の少かつた事、十中の九までホルトガル語であつた事なきが、即ち日本歴史で、當時の國狀を語り民性を語る興味の在する問題であらう。

大正十三年七月、半狂堂に於て廢姓外骨記す。

▼大正十三年九月一日發行、菊半殺版九一頁。定價金壹圓。發行所は東京市下谷區上野櫻木町二十二番地半狂堂。

▼ビイドロさかピロウドさかテンブラさかメリヤスさかいふ當時の外來語が讀み込まれた句集である。すべてが外骨式に出來あがつてゐるので川柳研究家以外の人達が讀んでも面白いものであるが作句

上の参考にならないことは勿論である。

新川柳六千句

(井上劍花坊選)

▼本句集の内容を知るために選者の序文を掲ぐ。

面前の譽有るは易く、背後の毀無きは難し、古川柳興つて一百年、當時の狂態、或は一脈の文連を持ち、新川柳創まつて十五年、現代の詩人、動もすれば遊戯の末に墮せん、選評の嚴王者の天下を治むるに似、編纂の重き、覇者の諸候を合すが如し、予其器に非ず、敢て之に従ふ、固より愚善を望む可からず、新川柳六千句、無名作家の努力を鑑み、明治末大正頭、句風變化の大勢を察し、聊か得んとするの志有る者は、來て此巻を開くに吝なる勿れ。

大正六年 柳樽寺劍花坊

▼大正六年十月一日發行。三六版二五二頁。定價六拾五錢。發行所は東京市牛込區神樂坂上、南北社。

▼柳樽寺系本位の句集であるが、撰者の序文にもある通り劃期的の好記念集である。今尙初心者の参考となる句も多からう。

埋め字を募る

盛んに應募して下さる

伯父が来てサテ針の娘が戻り
仲人へ酌み出すぶんの少し捨れ
縁談に母は若けりや行くこいふ
縁談へうれしいの腹立てる
縁談へ長男こいふ顔を
佳 吟

残紅 柳秀 同 凡平 同

うなづいた縁談針が早くなり 濁水
(評)父母に孝行夫に従順
縁談の後に淋しき父と母のほろ
(評)もう二三年放しごもない
縁談の次男一軒家を借り 水笛
(評)かくて他人の初めなりけり
縁談へ娘理性を失はず 無心

縁談にぶつきら棒の息子にて
(評)二た親ばかり血眼なる
縁談を酔はせて去なす女給達
(評)婚期も過ぎて派手なエプロン
大層な聲縁談になる長屋
(評)おらが娘は疵物じやない
縁談にうちの娘はまだ子供
(評)實は内々婚選びする

山雨樓 山月 雪村 其象

子福者のたしなみ縁談上手なり 萬よし
拙 吟
(評)女子参政の先覺者にて
見合ごは知らず中座で笑つて來 支柳
(評)天真爛漫縁談急進
再縁の子供が好きな事も 添へ 光路
(評)獨りが樂も三十までなり

作句練習のために埋め字を募集することにいたしました。

右の句は古句です。○○○○○○○○のころへ七音の文字を挿入して

出來るだけ佳句にしてください。古句も全く同じになつたからきて必ずしも嬉しいことではありませんが、古句も寸分たがはね句となることも

あるだらうと思ひます。多少違つた文字が這入つても句意に於ては殆ど違はぬやうになることもあるでせう。かと思ふに、一字や二字の相違から句

意が全然違つてしまふ場合もあるでせう。兎に向上七音の變化が、これほど違つたものとなるか、興味の深いところだと思ひます。これは出来るだけ

澤山な人に應募して頂きたいと思ひます。幾分作句上の參考にもならうと思ひますので、その結果を統計的に分類して發表したいと思ひます。

締切は二月十日です。締切日は嚴重に守つて下さい。

柳俳の峠より

安井ひろし

俳人尾崎放哉が死んだ。井泉水が朝日新聞の一日一文で「一俳人」を書く、そうする三川柳家の達人も句集「大空」をよんでみる。三汀久米正雄が文藝春秋に始めて層雲の放哉を讀んだように書く川柳家だけではない世間の多くの人が層雲の俳句といふものについて注意するやうになる面々いものだ。

すでに井泉水のもさへは放哉の墓はさごにあるかなさきたづねて來るそうであるその層雲派の俳人除史耶氏に。

古ハ路耶氏の句

太平洋に面して僕は馬鹿でした

三同氏最近の句

手紙を書いて山を下りぬ

の二つを示してわれくの川柳がはるか
に俳句以上のするさい人生觀をもつて居

る事を話したら非常に感嘆した。
俳人碧梧桐氏が主宰する三昧誌上の
人形を買ふて來てやれば人形の前に
座る

さいふ句を松耶君は置にうまいものだこ
れは川柳ださ感心して居た。大阪三昧俳
句會では川柳家の山雨樓、松耶、刀三、
馬行の諸氏がちよいと出席して同派俳
人々共鳴してをられる。

そして同會の俳人達は川柳について大變
興味を感じて居るのである。青々氏や三
允氏のように古い俳人が古い川柳を研究
して居るように新しい俳人間ではまた新
しい川柳現代の生きた川柳について興味
をもつて居るのである。すべて藝術にた
かさはるものが自己のある境地に安如す
るならもはやそれは墮落である。川柳か

詩でないならいゝ、むしろ藝術でない方
が光榮だ。川柳は川柳でいゝなご放言
して、其作るまごころ千變一律柳樽を讀ん

だ後ですぐ今日、いまのさつき發行され
た川柳誌の川柳をみてもちつこも變らな
いさいふのでは川柳の進化も望めない。
私のような現代句に親しんでからはいつ
て古句を調べてみようさいふ人間だこ

生きもののようにさらへる心太
心太ひよろくくさかしこまり
なきの句にぶつかるさ昨日句會で披露し
て居た句ではないかなご思ふのである

我も死して碑にはざりせん竹尾花
これは俳聖蕪村が芭蕉庵を再興して蕉翁
の高風を仰ぐために手向けた句であるが
その蕪村が天明三年の秋の末死のそのま
へに、病をみざる門人凡重梅亭百池に
語つた一節に

「今にしてわれは、しみじみ思ふ、先師
宗阿の翁(巴人)は俳諧の道かならず師
の句法に泥じべからず、時に變じ、時に

前奏曲

喜田 飯山

化し、忽焉として前後相かへりみざるご
 ごとくあるべし云はれた。わしは此先師
 が一捧下に頓悟して、や、俳諧の自在を
 知つて今日まで参つた。先師はまたわし
 に我が落語の語勢にならはず、何よりも
 蕉翁のさびしをりを慕つて古にかへさ
 ん事を思はねばならん。之が外虚に背き
 内實に應ずるさいふものを俳諧禪こ
 云ひ、傳心の法さいふ、ミ説かれた。こ
 のころは今又わしの心ちや、お前等も
 亦このころをころろして、俳諧のま
 こを守つて呉れよ、わしは蕉翁の心慕
 つて一すじに來た。今宵はしみく蕉翁
 の豪傑な心境が羨ましく思はれてならぬ
 おまへらも知つて居るぢやらう、かつて
 作つた枯尾花の句はわしが蕉翁に手向け
 る言葉じやが又同時にわしのかたみの言
 葉じやわしは芭蕉庵を再興したことが今で
 は何よりも心に楽しい』さいふて居る。

俳句では常によく「芭蕉に歸れ」さいふ
 芭蕉に歸る事が俳句の道ださされて居る
 然らば川柳は柳樽に還れさいふてそれで
 よいのであるか、私にはそれが川柳の行
 くべき道ださ思はれないのである。俳句
 の芭蕉和歌の萬葉は共に完成されたる
 詩の奥地であるが獨り川柳のみは決して
 過去に於て完成されたものでは絶對にな
 り。恐らく古川柳の大半は懸賞の目的物
 として取扱はれたくだらないもので、風
 俗研究家にとつてはソノ参考物であつて
 も、詩としての川柳を求めものものにみつ
 ては瓦を與へられる感があるのである。
 さうしても眞の詩として價値ある川柳は
 將來に期待される。太平洋に面して僕は
 馬鹿でした、から出發しなくてはいいけな
 い此拙文は昨夏書きさめておいた未完成
 のもので、心に充たぬ點もあります、
 お許しを乞ふ。

俄雨のさきなき、濡れながらガードに
 立つて電車の來るのをまたねばならぬや
 うなやうがある。この場合、すみません
 が一寸入れてくれませんかさへいへば
 別にいやな顔もせずに傘に入れてくれ
 るのは解つてゐても、さていひだしにく
 いものである。禮をいふのが億劫なさい
 ふ譯でもない。又傘をさしてゐる人にし
 ても、おはいりなさいミ肚では思つてゐ
 ても、口にはまだす人はすくない。かう
 した小景は街頭さらにあることでまりた
 て、ハハふほぎの新味もない。
 川柳のはうについて考へてみても、こ
 れミ殆ど同じやうな場合がある。初心の
 うちは、あたかも傘なしでガードに立つ
 てゐるやうなものである。他人の傘に入
 れてもらふよりまかに立寄るべき軒下は
 ない。遠慮なく先輩に就いて質したり是

正を乞ふことは私らの特權ではないか。之を先輩のはうから考へてみて、初心のものから色々質問を受けることを決してうるさくは思はれないと思つてゐる。又その質問ぶりによつて先輩の目にはあり／＼の進進の進境までが見ゆることと思ふ。

川柳に従事することに因つて物質的に損こそすれ、金儲けといふ不純な考へを有つてゐられた人は一人もないのであるからうるさく思ふ筈がない。

ながらく下積になつてゐた川柳をやつて明らみへ持出して來た先輩の努力には奉仕的な美しさがある。私らは幸福な後進だと思つてゐる。先輩に聴くことを忘れて徒に氣位を高くもち、すべてをケレンで行かうとするほど危険はない。況んや川柳に關する文献といふものもあまりに多くはないにおいてをや。生ける又獻さいひつべき先輩は今のところ、何派(若しいへたら)に屬してゐても、表

心から尊敬すべきものと思ふ。

古川柳中の難句解なきは十人が十人の企し及ぶこの能る性質のものでないから、けんある先輩の研究に待たねばならぬ。

私は、むしろ平易にして何人にも直に解る底の佳句に就いておたがひに、意見を交換しあふほうが、直接句作上に効果をもたらす量が多いのではないかと思つてゐる。道は手近なところにある。之をかへりみないのは川柳を愛するものゝさらざる所である。

川柳の味をおぼけてみるに、なかなか足は洗へさうにないばかりか、川柳を識らずにゐる時が惜まれるくらゐである。一方まだ、川柳を識らずにゐる人々におすゝめしたいやうな氣持にも成る、がしかし川柳ばかりが、おもしろいものでもないから、強ひておすゝめしようとは

しないし、又、川柳をやらない人々は私らが川柳を作つたり論じたりする時間には致々としてそれぞればかのことを研究してゐることを思ふに、私ももうかくはしてゐられない。一生懸命に研究しなければならぬと思ふ。川柳の研究に従事してゐて、一向ものにならぬやうでは、結局、ほかのこゝを研究してゐた人々にそれだけおさるさいふ悲慘以上の結果をみなければならぬやうになる。

川柳に手を染めてみるに、自分の語彙の貧弱にして餘白の多いにおぎろく、日常、口にしたり耳にしたりしてゐることばでも、さて正確に用ゐるゝなることばはたゞ行詰る。古典を研究して來ねば、俗語の一つも本當には解らないことを思ふに心細うなる。そして正しく用ゐられてあることばを見た時には、女が自分より美しい人を見たときのやうに嫉妬をさへ感ずるくらゐである。

禁酒漫語

安川久流美

朝顔にわれはめい喰ふ男かな

非人芭蕉翁が、其角の大酒呑みに對して與へたこいふ、いましめの古句である。

この十七字にも翁が悟りをよんだ句意が充分に含まれてゐる。

私が既往十五年間の上戸としての失敗はされだけに多かつたであらうか。幾度か、やめやうとしてはやめられなかつた。然し遂にはやめる日が再來した。

感ずる所ありなんて月並の文句は書くまい。

友曰く

「ナゼ君は酒をやめたか？」

私は直ちに

「愛する長女郷子のために」
と答へた。然し又之が一ツ私の生活苦で

れば之を踏襲しても更に不都合はないものと思はれる。

改造社の山本實彦氏何に感じてか現代日本文學全集の刊行を企てゝゐる試みにその内容見本を一瞥するに殆ど小説ばかりにして、川柳に至つては一句も收めて

ゐないやうである。けれども私は山本氏を責めるほご野暮でない。

今に、わが川柳も一般の常識といふ域にまで理解せられることゝおもふ。事實においてさう來なければ嘘だ。そして川柳が常識化せられてくれればほご、専門に常識のさかひ目がテニスコートの

ラインのやうにはつきりさなるさおもふさうなつたあかつきには、これまでに曖昧な態度でもせられた川柳は自然に淘汰せられて、そのあとには本當に藝術品としてのかわりの高い川柳のみがさんぜんとしてその本来の光を發することであらう。

正確な語彙を用ゐたいといふ慾望は赤ん坊が母乳を求めらるやうに一筋である何んかが氣の利いた語彙(たこへそれは古人も已に用ゐてゐても)を用ゐるさしはらくはそれが流行することがあるのを見ても事實である。さうしてこの現象は今も古も渝りはない。かつて白樂天の賣炭翁を讀んだをりに
兩鬢蒼蒼十指黑
こいふ句があつた。ピピツドな寫實であると思つて忘れかねてゐた。このごろある句集を見てゐたら
元日に炭賣十の指黒し
こいふのにめぐりあつた。けれどもこの場合、頭から彈劾する氣にはなれなかつたところか、却つて、その人の讀書眼の鋭いのに對して敬意を表したくなつたぐらゐである。たまたまこの句の作者が、蕉門御々の人物であつたがためばかりではない。之を要するに、いかに先人の用ゐた語彙であつても、それが遂に自家のものとなり、完全に燃焼しきつてさへ

あらう……。

三十五才も過ぎ去らうとする私は、酒
なくて何のおのれが櫻……の時代も共に
去つたのである。

誰かの川柳に

「いつまでも浮れてすます年を練り」
といふ句があつた。現在、それに襲はれ
たのである。

酒呑まぬ私はさびしい。

だがそのさびしさに附合つて下さい
友らにいふより致し方ない。

私の禁酒は私個人の禁酒であつて、い
たづらに極端な禁酒論者でないことを附
記したい。だからクリスチャンではなく
好きな人にはすゝめてもよい。

私の酒のまさる、さびしささ、酒呑ん
での失敗さを對照して、そのよき方を採
用したに過ぎない。

暮の浪花座

萬よし 生

新聲劇中田正造君より一日附けで
盲腸炎を確定、腹の痛みもさる事乍ら、
心の痛み胸の惱みにもだる申候、今一
時間後はネムリの注射を致し手術臺上の
人さ相成り申候、いふ回生病院の病床
からの手紙が来た。

舞臺の科白にでも泣かされる私は、こ
の事實上の消息にすつかり參つた。中田
君の居ない新聲劇を八日の晝、寒いかな
り空いた芝居を見て来た。これは川村花
菱氏の巻説清水一角が出し物であるから
劇を通じて花菱氏に接する期待もあつた
からである。

舞臺以外の中田君は新國劇時代から
の店の客である。倉橋も田中も辻野も小
川も俳優らしからぬ餅が立鍋に角帯をし
めて、来る夜も来る夜も上かんに親しん

だものであつた辻野も中田も私とは三四
回大阪で神戸で青樓で呑み明かしたこも
がある。三人共可なりの酒量の持主で痛
飲した。黙々として満を引くのが中田氏
で、辻野君が恥しさうな都々逸を唄ふ處
は舞臺とは別な可愛さがある。私一人眺
ねたりうなつたりして騒ぎ廻つた。いつ
でも血みぎろ(割前の事)であつた事は言
ふまでもない。中田君の劇談や、抱月氏
を矢ふた當時の須磨子の秘密の挿話だこ
が、澤正はピカ一でなければ芝居が出来
ぬ性格だこが、井上正夫が舞臺で氣張り
過ぎてチビつた話さかを、あの重い口か
ら聞かされて色々々々啓發せられたもので
ある。川柳家花菱氏の存在を喜ぶものは
同人美の作君ではない。

閑話休題、花菱氏の清水一角は三幕五
幕。

序幕 (一)おろく茶屋 (二)八ツ山下
第一幕 清水一角上杉家仕官の當夜

南地偶會

(十二月二日夜)

中折の型が女給の手になをり 馬 行
 嘘つけと鏡がこちら向いてゐる 同
 ぞぐはの心へコーヒのぬるい夜 同
 懐爐のぬくみに家のおもははれ 同
 春なれや薄桃色の 手紙なり 破 傘
 夕刊を丸めて夜の 人さなり 同
 しみじみと語たき夜の足袋をはく 同
 いろを持つ女ばかりに見ゆる夜ぞ 刀 三
 海が二つに割れて戀人の笑顔 同
 戀人のうちのやゝ兒にきらわれる 同
 お供さ見へ帯をきつちり結んで居 松 耶
 なつかれて人のよさをな聲を出し 同

同郷川柳會 (石川縣人)

(十二月四日夜) 於二柳子居

かき船のゆらりくさ味を付け 加 香
 かき船のさこから煙突を折り 三 笑
 かき船へ渡るも蓑を持ち馴れて 同
 かき船の上で電車のひびくこと 二 柳子
 かき船で河をきたないものさ知り 同

萬よし偶會 (十一月二十日)

萬よし報

今遣入る顔が映つた喫茶店 馬 行
 喫茶店こゝにもモダンがルあり 同
 喫茶店水族館のやうな色 三 笑
 文壇がどうのかうのさ喫茶店 同

喫茶店の小さな室を嬉しがり 加 香
 喫茶店で七分ほど打明けける 萬よし
 喫茶店心齋橋を一寸折れ 同

(二) (十一月廿八日)

蟻のやうに工夫電柱へ寄つて来る 三 笑
 電柱の工夫水盂もせす 享 三
 電柱のピラ半日で放つさかれ 三 平
 ロケーションあの電柱に困るなり 祇 梵
 電柱の工夫妻子を持つ身にて 萬よし

(三)

酒だけは如何にか呑める除隊兵 柳 秀
 退營の後備ハハハと笑ふだけ 放 馬
 新婚の百燭光をまぶしがり 文 錢
 退營の世間は他所の國のやう 萬よし
 丸刈りで退營兵と知られたり 風來坊

(四)

(十二月七日)

大根さ人蔘同じ土に生き 文 錢
 大根へフト未亡人思ひだし 同
 到来の大根ですま届けられ 同
 大根が天満について未だ明けず 萬よし
 主義あつて博士大根ばかり喰ひ 同

刀根山師走小集 (十二月十日)

其象報

歸省して聴く鶯のなつかしさ 白 蝶
 嬉しさは明日の晴着(待ちきれず 同
 晴着きて心にもない紅をつけ 同
 鶯も寂しいものよ病んで見よ 晴 久

晴着きて人形さなる今朝の春 同
 鶯の身に燈籠が何になる 杏 三
 晴着着た顔のごこかに憂あり 同
 鶯に慰められる病ひなり 桃 哉
 元日に着せる晴着は枕元 同
 たまに着る晴着に錢の掛かること 讚 柳
 死出の旅の晴着にならうさは 同
 ひつそりさ鶯だけの聲さなり 其 象
 思ふふも啼いて鶯あへて出し 同
 手拭を一つ晴着に添へて出し 同
 新開地晴着はつきり見せてゐる 同

柳路居鼎坐吟 (十二月五日)

湯豆腐で友と語りひ友をまつ 千代二
 合宿へ顔々さくる情報 同
 合宿の意氣軒昂は雪であり 同
 湯豆腐にごつてか三味が鳴つて 柳 路
 湯豆腐に電車のきしる音もよし 同
 合宿にラチオのひけた賑やかさ 同
 合宿の壁に張つてるプロマイド 同
 妹を寄宿舎で皆な嘘にする 同
 湯豆腐の丁度よい頃飯ができ 同
 湯豆腐は釣堀をする手付なり 同
 應援に出た寄宿舎の静かすぎ 同

▲本欄の投句を募る

各地例会又は小集會等の句稿をお寄せ下さ
 い。随時締切ります。

投稿所 本社事務所 松耶宛。



編 輯 後 記

▼文壇の人々や、學者や、社會人からぼつ／＼認められて來た本誌が、ごこまで伸びてゆくかは、一つに同人の結束と、愛讀者の熱誠と寄稿家の後援に俟たなければならぬと思ふと、一層の結束、一層の愛讀、一層の後援を希ふごこ切なるものがあります。どうか、寸時でも暇がないやうに御盡力を仰ぎます。小生さては微力の及ぶかぎり闘つてゆく覺悟で居ります。

▼柳誦の尤も困難としてゐる月刊斷行を本誌は創刊以來斷行してまゐりましたので、月刊斷行といふ事は今日の私達にとつて物の數ではありません。私がたゞ病臥しても本誌は決して休刊するやうな憂ひはありません。内容充實と社の主義主張の

一路をひた押しに押し進むばかりです。

▼本誌の新春特別號は豫想外に編輯者を僞ましました。それは限りある紙數に、豫想以上の原稿を盛らねばならぬといふことでした。從來ウソと詰め込み主義で押しして來た本誌が更に多くの原稿をどうして盛り切ることが出来ませう。と云つて無闇に紙數を増せば會計の方から苦情が出るにきまつてゐる。從來の特別號で常に犠牲を拂つて來た本誌としては最早、これ以上の犠牲を拂ふ譯に行かず、さりさて原稿を無闇に割愛することは編輯者の立場としても遺憾の極みであるから最後の一方法として本誌に限り定價の値上げをすることにいたしました。愛讀者諸君も諒せられたい。

▼次に新同人として安井ひろし、西本三笑、二君が入社されました。今後の活躍を祈ります。

▼本誌のため特に岡田三面子博子は「大太ぼつち」を岡本一平氏は「漫畫漫文藝術的の採み方」を川村花菱氏は「作品か仕事か」を正岡馨氏は「川柳家の家の字に就いて」を寄稿され柴谷柴舟氏は表紙畫を寄せられました。御厚意を感謝して居ります。其他西原柳雨氏木村中文錢氏、蛭子省二氏、安川久流美氏等の不斷の寄稿に相俟つて一層光輝ある特別號が出来あがりました。尙小出権重氏と前田

雀郎氏は本誌締切までに間に合はぬので貳月號を約されました。更に次號のよりよきものが出ることも豫想されて愉快です。

▼同人高見柳骨君が除隊となつて舊冬十二月一日に大阪へ戻つて來ました。當夜本社からは朝陽と双柳と私が出迎へました。若い張り切つた好紳士となつて歸りました。梅田驛頭で堅い握手を交換しました。若い人の殖ゆることは一種の力強さを感じます。

▼同人河南放馬君が舊冬十二月婚約とのひ華燭の典を擧げられました。

▼同人塚崎松郎君は大阪市東淀川區中津町二九三へ、堀口塊人君は大阪市西區土佐堀通一丁目二十四番地へ移轉。

▼生方敏郎氏は社會評論雜誌「ゆもりすさ」を新早々々東京市小石川區音羽町三丁目二十一番地から創刊されるさうです。御購讀をお薦めいたします。

▼小生の病氣は十二月に入つて輕快となり再び多忙裡の人となつて居ります。御見舞に預つた方々の御厚意を謝します。

▼青森縣黒石町みちのく吟社の編輯兼發行人であつた野呂冬山氏が十一月十三日に三十九歳で亡くなられました。又園田花鷹君（大阪）十一月七日に永眠されました。數年前まで新しい川柳家として活躍してゐた大藤治郎君（東京）が十二月に亡くなりました。共に哀悼の意を表します。（路郎生）

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記する。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記する。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこ。

▼用紙は半紙又は同型の野紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこ。

募 集

第四卷第三號課題

一月十日締切。

(各題二十句以内)

▼支配人 村田 鯛 坊選

▼火 鉢 駒井美の作選

▼下 宿 太田 朝陽 井上 刀三 共選

第四卷第四號課題

一月十日締切。

(各題二十句以内)

▼疊 前田 雀郎選

▼鏡 麻生 葭乃選

▼靴 住 夢遊 橋本 二柳子 共選

每 號 募 集

▼近作柳壇(三十句以内) 麻生路郎選
▼各地柳實(會歌) 家崎松郎編
▼文章(評論研究吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所に宛て願ひます

價 定

一 部 參拾錢
本誌二部 五拾錢
六 部 壹圓六拾錢
十二部 參圓
(共 郵 稅)

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込になるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます ▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも償げる様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は最新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

大正十五年十二月廿五日印刷
大正十六年 一月 一日發行

第四卷第壹號
(毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二郎
發行所 兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四番地
川 柳 雜誌 社
振替大阪三五一四番

大阪市港區八條通二丁目十二番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

店書開賣
(大阪) 明文堂 公立社 柳屋 岳文堂 和正堂
(東京) 仲見世 玉森堂 (神戸) 米田 後謙
(金澤) 石井 (函館) 石塚 (廣島) 金星堂

石井突支坊

尼崎市外杭瀬

さいころ川柳社

山川紫明

京六波羅樋口小路

川柳に手を染めて初めての
年を迎へます何卒御愛顧の程を

金宅志郎

神戸市兵庫須佐野通
四丁目百〇八番屋敷

大久保大夢子

神戸鐵道局 大阪線業務所

岩本素人

久世一路

大阪市港區難波島町二丁目
電話櫻川一五五九番

南海電車

池澤樂居

大阪府泉北郡高石町(高師の濱)

長崎柳秀

阪神沿線御影字榎本
電話御影六八九番

森井荷十

東京市下谷區坂本町一ノ八

若葉會

藤井椿薰

大阪市港區九條通三丁目五六三

西村山月

大阪市港區鶴町三丁目
第一區一九八號

河添一文字

大阪市此花區大野町二丁目九〇

吉川啞人

大阪市港區八條通二丁目北小路

森田輝翠

大阪市天王寺區生玉前町八〇

關本雅幽

大阪市漆區鶴町三丁目一一〇

柳蔭社

堀楓林

和歌山縣田邊町今福町壹

中澤濁水

高知市本與力町

黒木莢豆

西宮市與古道卅二

熊本博久

大阪市住吉區平野梅ヶ枝町五丁目二九

越村加香

大阪市東區備後町二丁目九(金子方)

西本三笑

大阪市天王寺區東平野町二丁目(山田重方)

松本助六

大阪市住吉區平野梅ヶ枝町五

徳田双柳

大阪市住吉區安立町五丁目一二三

高橋かほる

大阪市西區北岸屋町二〇一
電話南五九六番

南海電車

濱寺食堂主任

太陽朝陽

大阪府南海沿線濱寺驛前

電氣旬報柳壇

(毎月三回發行)

川柳を募る。雑吟。用紙ハガキ。小生宛

安井ひろし
同欣女

大阪市西區安立寺町四丁目七七

横田眠聲

大阪市西淀川區姫島町五二一

藤冷笑

大阪市此花區上福島中一丁目五

案山子

大阪府外麻田村箕輪

水森谷鮎美

大阪市此花區龜甲町二丁目七九

蛇籠川柳社

大阪府南区南船場二丁目二番

牧田憲翠

大阪府東成區猪飼野町壹貳〇壹

北野白帆

大阪府南区南船場二丁目三

石村喜音坊

大阪府南区心齋橋筋二丁目三

宮田淡風

喜田飯山

井上刀三

轉居致候

塚崎松郎

大阪府東淀川區中津町二九三

橋本二柳子

大阪府港區八條通二丁目十二
川柳雜誌社事務所

迎 春

北 山 悟 郎

大阪市北區北森町三二

北 山 十 字 路

大阪市北區北森町三二

東 谷 聞 路

大阪市北區旅籠町三二一藤繩方

中 西 久 郎

大阪市北區天神橋筋二丁目二五

田 中 彩 秋

大阪市北區興力町一丁目一八

東京市芝區愛宕町一ノ一六

川柳雜誌社東京支部

岩崎柳路

電話青山四一九一番

東京市外中野町小瀧橋際一四九八

大和米菓株式會社內

酒井駒人

東京市麴町區有樂町三ノ三

日本榮養協會內

檜山千代二

萬よし川柳新年募集 (第三十二回)

題「朝」

五句限、用紙ハガキ、〆切一月十日嚴守

井上刀三
大石文久
黒木茨豆
小須賀幽香
喜田飯山
共選

□石の上に三年、川柳宣傳に微力を盡した萬よし川柳は第四年頭の試みとして右五氏共選の快諾を得て、大正十六年を豫言し得る收穫を得んぞ、斯道に精進せらるゝ各位の投句を待つ

□高點十席乞粗景呈上

□萬よし川柳は萬よしより清記匿名にて各選者へ送るものぞ

□發表は萬よし店頭及川柳雜誌誌上

投句處

大阪道頓堀新戎橋 庄萬よし
神戸湊川電氣局西 庄萬よし

川柳
雜誌

覆面

毎月
發行

神戸柳壇の權威

東洋鬼君の明快、嶺月君の健實、清公子君の熱誌上に横溢して一讀の價値充分、敢て提灯を持つておく。
(馬行生)

誌代一部十二錢 一年分一圓廿錢(送料共)
見本請求二錢切手四枚封入の事

同人
三條 東洋鬼
佃 嶺月
古澤 清公子

發行所
神戸市北長狹通八丁目九七
覆面川柳社

林田馬行

大阪市外豊中榮通二丁目石賀方

渡島川柳社

川柳名句會

龜井花童子

函館市青柳町五〇

「雪柳」創刊號を一月十五日に出

します御愛讀を——

壹部 送料共貳拾錢 隔月發行です。

迎 春

川柳 溪花坊編輯

第三種郵便物認可・毎月一回一日發行

大 大 阪

普通號 四十頁 前後

新年號も普通號も・(一部金貳拾錢)

新 第 四 年 卷 號

倍大頁▲表紙繪題字樋口富麿壽伯木版十度刷凸版寫真版
數個挿入▲向上慾に燃ゆるが如き各作家の精選せる創作
句さ▲先輩諸氏及新進作家の研究文と雜文は時代を語る
不朽の寶庫なり是非新年號の大大阪を(溪)

發行 所

大阪府北區老松町
電話二四五六番

大 大 阪 川 柳 社

婦女世界

毎月一回發行
新年號
定價 六拾錢
郵税 四錢

關西唯一の婦人雜誌として定評のあるものです。記事は他の婦人雜誌と趣を異にした實生活に觸れた新しいものばかりです。口繪寫眞は毎號三十數葉を入れています。

令嬢畫報

定價 壹圓八拾錢
郵税 拾貳錢

「令嬢畫報」はお嫁入りの必需品であることをお忘れになりませんやうに。そしていつも好評で、すぐ賣切れになりますから愛讀者の方は直接本社へ御申込み下さいませ申込順に御送り申し上げます。

結婚調査

秘密嚴守
調査正確

人生の大事先方を調べぬと、ごんだ失敗を招きます。縁談が持上りましたら是非親切で速い本社の結婚調査部を御利用下さい。

大阪市北區堂島中一丁目

婦女世界社

電話北五五五八番
振替大阪四〇一〇二番

東京市京橋區宗十郎町一五
國文社ビルディング内

婦女世界社東京局

電話銀座一八八六番
振替東京四〇二二三番

迎

春

新聞雜誌の寫眞版凸版は是非

豐田製版所

大阪市東區德井町二丁目

電話一四八番

新聞雜誌印刷並ニ圖書出版業

其他美術
印刷百般

藤本兄弟社

大阪市東區農人橋二丁目
電話東一七〇番◇七七〇番

❖ 探偵は……………赤埴へ!!

❖ 證據 偽證詐害行爲隱匿財產特許侵害其他證據蒐集

❖ 信用 會社商店資產信用乳母會社商店員雇員調査

❖ 所在 家出人拐帶遁亡轉居先不明其他ノ所在搜查

❖ 素行 學生會社員雇人ノ素行夫ノ素行妻ノ行狀内偵

❖ 婚姻 家柄血統祖先宗教父母ノ性格家庭性格素行學業
體質交友趣味嗜好技倆收入資產外必要事項調査

❖ 調査は……………赤埴へ!!

（側濱前ルビ村野（七二）一濱北區東市阪大

赤 埴 探 偵 社

番一七三二局本話電

清 酒



白鶴を別荘で飲み宅で飲み
酌をする度に白鶴頂かれ
よろこびに添へて白鶴届けさき

...〇...

これ丈はねご白鶴に生きてゐる
白鶴をいつもきらきらめくらしむき
白鶴の方に幹事は極めちまひ

灘 津 攝

嘉納合名社會醸

迎 春

清涼飲料

アサヒ
ソフト
ドリンク

アサヒ
ビール



大日本麥酒株式會社

初旅 は新設の南海特急電車で

暖き 絶勝 新和歌浦へ

冬知 らぬ

湯崎 白濱温泉へ
椿 温泉へ



初詣 住吉は

官幣大社

官幣大社

厄除

弘法大師
勸誘星祭師

八日 初卯

大方大

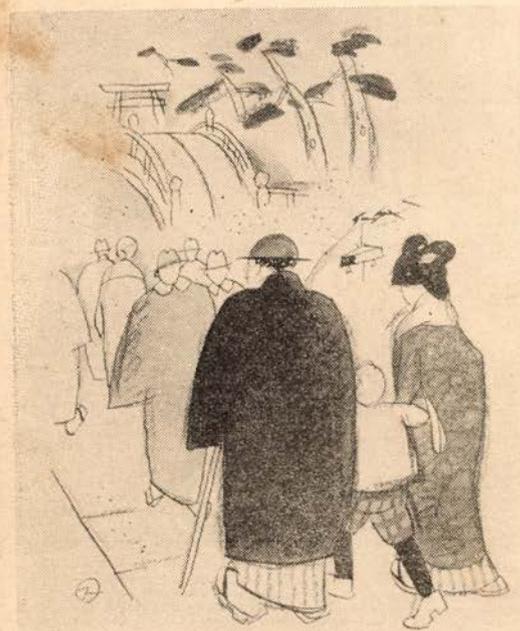
違鳥

心

九日 初辰

神神

神社社



にきびとり

美顔水

心ある家庭には是非常備せられたき皮膚衛生薬

(一) ニキビ、吹出物

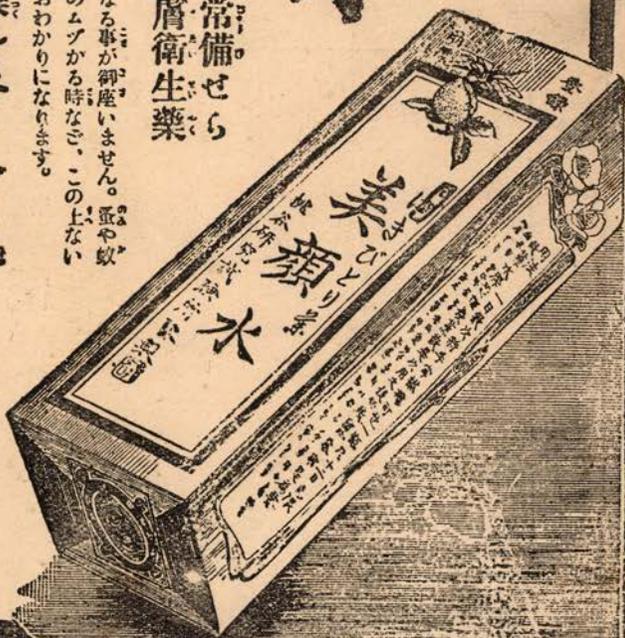
男子方でも、ニキビや吹出物の多いのは見よいもので御座いせんが、この薬は頑固なニキビや吹出物にも確かな効能がありますので、信用を博して居ります。

(二) 蚤、蚊、南京虫

その他毒のある虫にさされた時、この薬を附けますと、不愉快な痛さや痒さが止まり、さされた跡が

(三) 皮膚を美しくす

腫物なきになる事が御座いせん。蚤や蚊で夜お子方のムツかる時など、この上ない重要な事がおわかりになります。ですから、常用すればニキビ吹出物を防ぐは勿論、皮膚は次第に磨きこんだ様に綺麗になり、顔の美しさを増しますので、心ある家庭に常備せられて居ります。



元賣發
(阪大・京東)
館天順谷桃

大正十三年三月三日第三版發行所 (毎月一日發行)
大正十五年十二月二十五日印刷 大正十六年一月一日發行

第四卷 第壹號 (第三十六號)

本號二限り

定價金五拾錢